

文部科学省 大学教育再生加速プログラム
テーマⅢ（高大接続）



日英中トライリンガル育成のための高大接続
事業報告書

2014

平成26年度



杏林大学

文部科学省 大学教育再生加速プログラム
テーマⅢ（高大接続）



日英中トライリンガル育成のための高大接続 事業報告書

2014

平成26年度



杏林大学

杏林大学 事業報告書

目次

I. ごあいさつ

大学教育再生加速プログラムに採択されて
学長 跡見 裕 …………… 1

グローバル人材育成を加速させるために
高大接続推進室長 稲垣 大輔 …………… 2

II. 事業概要・計画

…………… 3

III. 事業実績と成果の概要

大学教育再生加速プログラム テーマⅢ：高大接続
「日英中トライリンガル育成のための高大接続」
平成 26 年度実績報告書 …………… 7

IV. 事業実績の具体的内容

〈運営〉

1. 事業体制の確立
学内の基盤構築・ライティングセンターの設置・
情報発信 ……………13

〈高大接続〉

2. 杏林 AP ラウンドテーブルの開催 ……………14

3. 高等学校との交流 ……………17

4. 順天高等学校との連携協定書の調印 ……………19

〈行事 / 教育〉

5. 日英中トライリンガルキャンプの実施 ……………20

6. ライティングセンターの活動実績と成果 ……………22

7. IELTS 対策講座と試験実施を高校生にも開放
……………24

8. 高校と大学をつなぐ FD / SD ……………25

9. ルーブリックの作成と試験的实施 ……………27

〈波及効果〉

10. 聖徳学園高等学校のベトナム研修に対する
サポート ……………31

11. 順天高等学校生徒への DNA 関連技術実習の
開催 ……………32

〈広報活動〉

12. eBook の連携高等学校への開放 ……………33

13. WEB を使った広報 ……………34

14. マスコミ取材 ……………35

〈会議記録〉

15. 杏林 AP 推進委員会（第 1 回～ 3 回）議題
……………36

16. 高大接続推進委員会（第 1 回～ 6 回）議事録
……………39

V. 事業推進組織 委員一覧

……………45

I. ごあいさつ

大学教育再生加速プログラムに採択されて

学長 跡見 裕



少子高齢化の進む我が国において、未来を導き支える人材を輩出することのできる教育改革が叫ばれています。こうした中、杏林大学ではこの度、文部科学省の平成 26 年度「大学教育再生加速プログラム」に採択されました。テーマは「日英中トライリンガル育成のための高大接続」です。

杏林大学においては、平成 22 年度から実施された第 2 次中期計画において高大連携推進実行部会を作り高等学校との連携を深め、杏林大学の持つ教育・研究資源を高等学校に開放し、スプリングセミナー、インターンシップなどで高等学校と連携を深めてきました。

平成 24 年度には外国語学部を中心とする教育目標とその成果が評価をされ、文部科学省の「グローバル人材育成推進事業：現、経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業に採択され教育のグローバル化を一層目指しています。平成 25 年度には同省の「地（知）の拠点整備事業」の採択を受け、今まで以上に地域社会への貢献を目指し、Moving Global, Staying Local のキャッチフレーズの下、足元の地域社会を支える人材からグローバルに活躍できる学生まで幅広い人材育成が必要と考えています。

この度の「日英中トライリンガル育成のための高大接続」採択は、そのような今までの積極的な取り組みを基盤にしています。杏林大学と高等学校、特に SGH（スーパーグローバルハイスクール）や SGH アソシエイト、そしてグローバル教育を目指す高等学校との意見交換と連携・接続を強化していきます。その中で高校生がしっかりと目的意識を持って大学に入学でき、入学後の学習がスムーズに行えるように教育目的や教育方法の開発としっかりと学修成果の評価を行える仕組みを、高等学校と共に進めていく予定です。

地域貢献の重要性とグローバル化がともに進む経済社会の中、有為な人材育成について教育関係者のみならず、皆様方のご指導ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

グローバル人材育成を加速させる ために

高大接続推進室長 稲垣 大輔



この度、平成 26 年度文部科学省「大学教育再生加速プログラム」テーマⅢ（高大接続）に採択され、最大 5 カ年の補助を受けながら事業を実施していくことになりました。この事業は「AP プログラム」と呼ばれていますが、AP は Acceleration Program（加速プログラム）の略語であると同時に、アメリカを中心に行われている高大接続の方式 Advanced Placement（アドバンストプレースメント：高校生に大学レベルの教育機会を提供し、入学後に大学の卒業に必要な単位として認定すること）の略語でもあります。

杏林大学が進めていく事業の基本構想は、「日英中トライリンガル育成のための高大接続」です。これまで築き上げてきた高大連携を基盤として、単なる教育機会の提供に留まらず、グローバル人材育成という教育目標を共有する高等学校との連携に特化する形で、教育内容、教育方法、教育成果の発展的連携・接続を図っていきます。具体的には、文部科学省が指定したスーパーグローバルハイスクール（SGH）、SGH アソシエイトだけではなく、グローバル人材育成に積極的に取り組んでいる高等学校との高大連携・高大接続を進め、より効率的かつ効果的にグローバル人材育成を加速させることを目的としています。

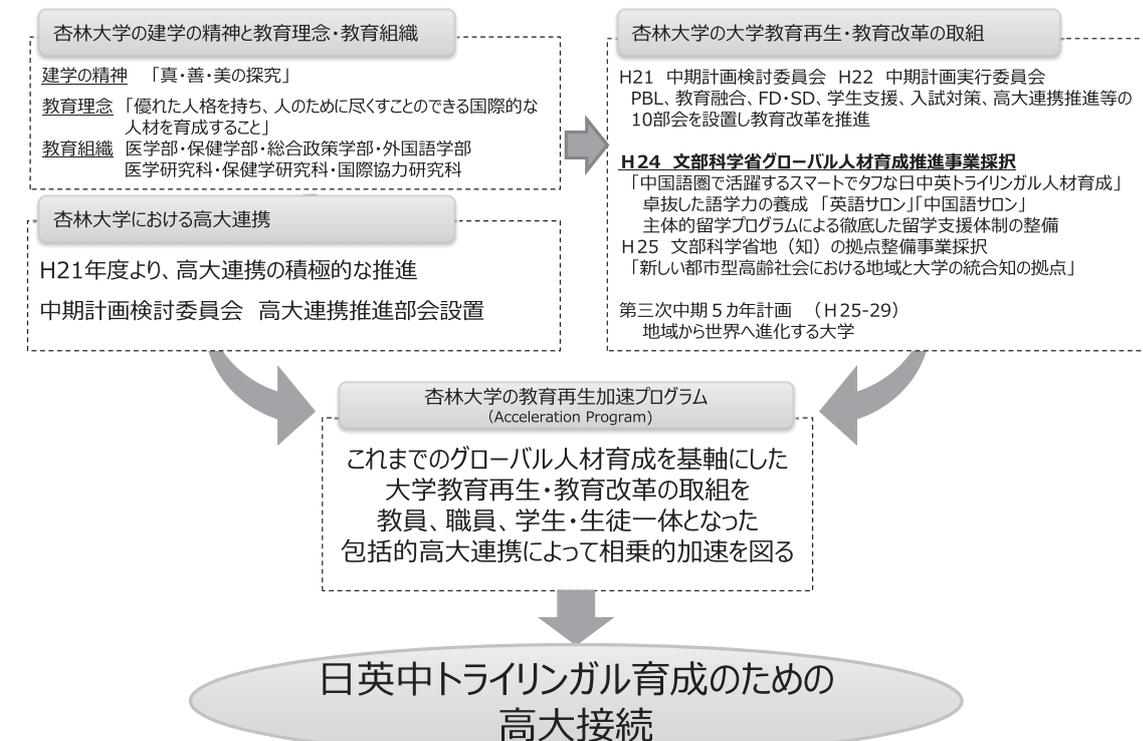
母語である日本語に加え、英語・中国語を操るトライリンガルになることが、中国・米国という 2 大国に伍する日本社会の未来を築くため、そして、地球上のより多くの人とコミュニケーションをとり世界の発展に寄与するためにいかに有益であるかという、本学のグローバル人材育成が拠って立つ認識を高校生にも広く普及し、グローバル人材になる志を持った若者の成長を促進していきます。

平成 24 年に採択された「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」のさらなる加速と、平成 28 年に予定されている井の頭キャンパス開設を契機に飛躍的進展を望むことができる高大接続の加速との、相乗的かつ複合的加速を図り、杏林大学の社会的機能を強化していきます。

どうか皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

Ⅱ. 事業概要・計画

事業の概要



事業申請時点までの高大連携の実績

H21中期計画検討委員会 H22中期計画実施委員会 高大連携推進実行部会

- 八王子キャンパス周辺 116校に働きかけ→重点14校と教育交流・連携活動推進（八王子北高等学校、青梅総合高等学校、町田総合高等学校、啓明学園高等学校、三鷹高等学校、羽村高等学校など）

青梅総合高等学校・八王子北高等学校と「高大連携教育協定」締結

- 「大学体験プログラム」「高校生インターンシップ」「医学部体験講義・実習」などの高大連携教育機会の定期的実施
- 「スプリングセミナー」 H23、24、25年度と春季休業中に高校生に対して大学における教育機会を提供
- 「大学授業科目による高校側の単位認定」「マーケティング論」（総合政策学部）「ホスピタリティ実習」（外国語学部）
- 「中国語がつなぐ高大連携」 本学中国人留学生在が青梅総合高校にて中国語指導と交流

聖徳学園中学・高等学校とグローバル人材育成で「高大連携協定」締結

- 「大学の授業科目への特別聴講生徒受入れ」「大学の各種公開講座への聴講生受入れ」「大学教員による高校への出張講義」「教育についての情報交換及び交流」に関して連携
- H26年度 高大接続を図る「Link English」で本学教員が定期的に出張講義
- 教員人事交流：H26年9月より外国語学部英語学科卒業生が非常勤講師として採用

第4回杏林大学グローバルシンポジウム（H26年9月6日開催決定、杏林大学三鷹キャンパス大学院講堂）

- テーマ：「高大連携によるグローバル人材育成」
- 参加予定校：聖徳学園高等学校、順天高等学校（SGH指定校）

杏林大学グローバル人材育成の実績と高大接続

外国語学部を中心とした日英中 3 言語教育の実績

- 1988年 外国語学部（英米語学科・中国語学科・日本語学科）開設
- 2001年 外国語学科 1 学科制に
- 2006年 英語学科開設 3 学科制開始と同時に中国語を学部必修科目に
- 2009年 国際協力研究科国際言語コミュニケーション専攻日中通訳・翻訳研究 コースの設置
- 2011年 中国語学科開設 現在の3学科体制（英語学科・中国語学科・観光交流文化学科）に

経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援（旧グローバル人材育成推進事業）

「中国語圏で活躍するスマートでタフな日英中トライリンガル人材育成」

- ・日英中 3 言語を必修とし達成目標を明示した語学教育
- ・卓抜した語学力の養成：英語サロン・中国語サロン
- ・徹底した留学支援、中国五大外語大学との協定締結
- ・中国語圏の歴史・政治・経済に関する学際的学び（総合政策学部）

	中国語学科	英語学科 観光交流文化学科
中国語	・HSK5級以上 （中国一流大学入学レベル） ・中国語検定2級以上	・HSK2級以上 （日常会話レベル） ・中国語検定4級以上
英語	・TOEIC500点以上 ・TOEFL iBT52点以上 ・IELTS4.5点以上	・TOEIC800点以上 ・TOEFL iBT80点以上 ・IELTS6点以上

杏林大学の教育再生加速プログラム（Acceleration Program）

中国語の必要性を高校生に普及

高大接続による日英中トライリンガル人材育成

高校→大学→大学院の一貫した高度な中国語教育

本事業の構想—1

基本認識

- ①中国は世界第2の超大国、日本と密接な関係、日中両国にさまざまな問題
→中国の文化・政治・経済理解の必要性、中国語学習の必要性
- ②中国語を第一言語として話す33カ国1,197百万人、英語を第一言語として話す99カ国335百万人(出典: Ethnologue) とコミュニケーションできる人材の有用性
- ③杏林大学が目指す社会機能：異なる言語・世代・立場を超えて建設的にコミュニケーションできる人材の育成

特色

グローバル人材育成という教育目標を掲げた高大接続

スーパーグローバルハイスクール(SGH)指定校、SGHアソシエイト、グローバル人材育成に積極的に取り組む高校との高大接続を図る

日英中トライリンガルの必要性を高校生・日本社会に広く普及し、高大一体となって効率的に日英中トライリンガル人材の育成を図る高大接続

杏林大学の中国語の教育資源を活用：中国語の必要性を広く高校生に普及するため、ピアサポーター（特に中国からの留学生）による教育機会の提供

高大7年間の接続された教育課程で、日本語に加えて2言語（英語・中国語）の「卓抜した語学力」の修得を図り、日英中トライリンガルを育成

高校・大学を接続した他国の歴史文化に興味を持つ人材の育成

高校で目指す到達レベル

HSK2級
TOEIC500

大学で目指す到達レベル

HSK5級
TOEIC800

本事業の構想—2

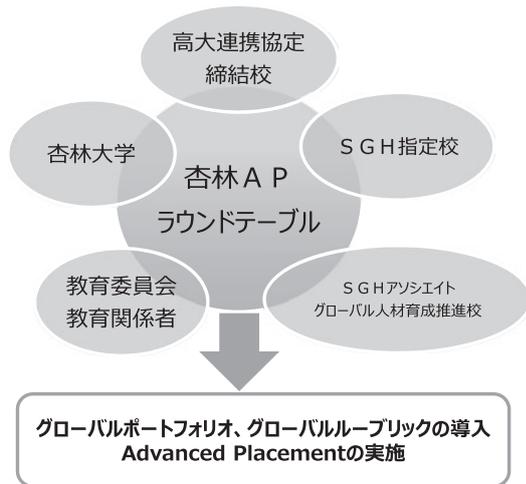
手段・方法

杏林A Pラウンドテーブル

杏林大学A P推進委員会と連携高校関係者、連携自治体（三鷹市・羽村市・八王子市）の教育委員会関係者が人材育成について意見交換する場

グローバルポートフォリオ、グローバルループリックによる高大接続

高校段階で修得すべき英語・中国語の語学能力・グローバル人材資質、大学で修得すべき能力・資質を明確化した上で、いかに効率的・効果的に接続していくかを検討し、ポートフォリオ・ループリック等の教育成果測定法を導入



期待される成果

①入試改革の加速

高校段階での英語・中国語の語学能力、グローバル人材資質に関する成果を、グローバルポートフォリオ、グローバルループリックで適正に評価する入試

②高大接続による留学の質向上の加速

留学者数の量的増加の加速だけではなく、留学時期の早期化、留学期間の長期化、留学先の複数化などの質向上の加速

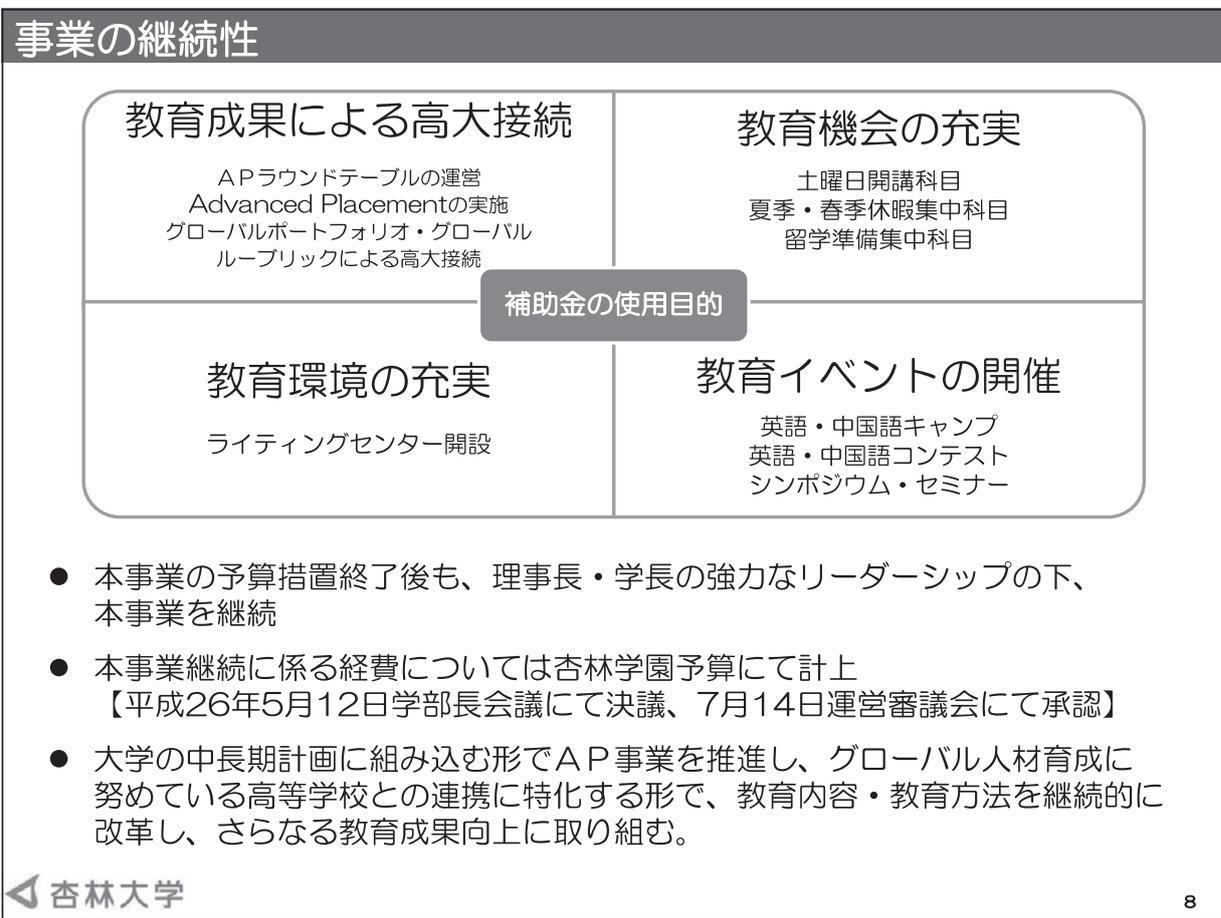
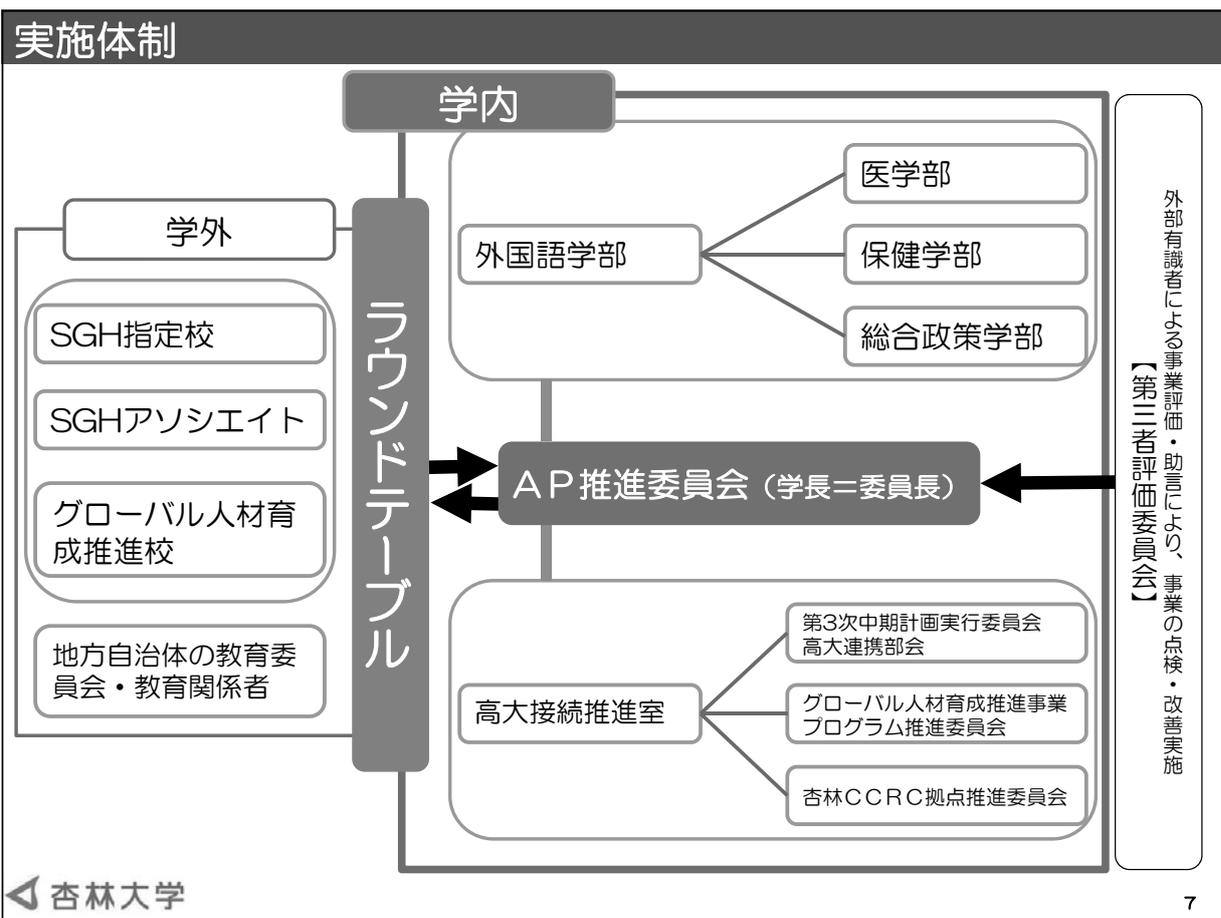
③日英中トライリンガル人材育成の加速

トライリンガル育成という目標に共鳴する高校と杏林大学が、教育成果測定法による連携・接続で、グローバル人材育成を加速

- ・高校で目指す到達レベル: HSK2級、TOEIC500点
- ・大学で目指す到達レベル: HSK5級、TOEIC800点

事業計画

	H.26 始動	H.27	H.28	H.29	H.30～ 継続
学内体制	<ul style="list-style-type: none"> ・大学教育再生加速プロジェクト推進委員会設置 ・高大接続推進室設置 ・外国語学部内にAP推進委員会設置 ・第3者評価委員会に関する検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・AP推進委員会と第3次中期計画委員会(高大連携推進委員会)との運動 ・第3者評価委員会開催による外部評価実施 	<ul style="list-style-type: none"> ●三鷹市に井の頭キャンパス開設 ●4学部教育・研究機能を集約 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己点検・評価継続 ・第3者評価委員会による外部評価継続 ・H.30以降の事業継続体制の構築 	
高大接続体制	<ul style="list-style-type: none"> ・杏林A Pラウンドテーブル実施 ・連携校拡大、重点連携校選定 ・グローバル人材育成連携協定締結 	<ul style="list-style-type: none"> ・杏林A Pラウンドテーブル実施 ・グローバル人材育成連携協定新規締結 	<p>【体制】</p> <p>AP推進の全学的サポート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・AP推進委員会による自己点検・評価および第3者評価委員会による外部評価を踏まえた事業改善 <p>【高大接続体制】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H.26～27事業の継続 ・英語・中国語レベルアップ・スキルアップの共催協議 ・グローバル関連新規科目の内容協議 <p>【教育】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H.26～27事業の継続 ・スパー・グローバルパス設置 ・Advanced Placementによる単位認定 	<ul style="list-style-type: none"> ・H.26～28事業の継続 ・グローバル連携協定校とのFD・SD研修会実施 ・グローバル連携協定内容の発展的見直し 	<ul style="list-style-type: none"> ・H.26～29事業の継続
教育	<ul style="list-style-type: none"> ・ライティングセンター設置・稼働 ・時間割編成(グローバル・COC関連科目の土曜日開講、夏季・春季休暇集中科目化) ・新規科目設置(IELTS・TOEFL対策科目、教養グローバル関連科目) ・学則・履修規程措置(Advanced Placementのための学則・履修規程制定) 			<ul style="list-style-type: none"> ・Advanced Placementによる単位認定 <ul style="list-style-type: none"> > IELTS・TOEFL・TOEIC対策集中科目 > 高校生対象教養グローバル関連集中科目(春季・夏季) > グローバル・COC関連土曜日開講科目 > 英語・中国語キャンパス科目・中国語夏季研修 ・スパー・グローバルパスの効果測定 	
行事	<ul style="list-style-type: none"> ・連携高校関係者・高校生との協働による <ol style="list-style-type: none"> ① 英語・中国語キャンパス実施 ② TOEIC対策集中講座実施 ③ 中国語夏季研修実施 ・高大接続によるグローバルネットワークの開催 		<p>【行事】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H.26～27事業の継続 ・グローバルネットワークの共催 	<ul style="list-style-type: none"> ・H.26～28事業の継続 ・英語・中国語レベルアップ・スキルアップ共催 	



Ⅲ. 事業実績と成果の概要

大学教育再生加速プログラム テーマⅢ（高大接続） 平成 26 年度実績概要

補助事業の実績

(1) 全体

① 学内の基盤構築・関連施設の設置

学内の基盤構築

平成 26 年 9 月に「大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会」「高大接続推進室」を設置し、10 月 20 日に行われた「第 1 回大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会」（委員構成：学長、副学長、外国語学部学部長、医学部・保健学部・総合政策学部・外国語学部の教員 6 名、高大接続特任講師 1 名、高大接続推進室員 2 名、学園事務局員 1 名、大学事務部員 1 名、八王子事務部員 2 名、計 16 名）を通じて、「杏林大学高大接続推進室規程」及び「大学教育再生加速プログラムの日英中トライリンガル育成のための高大接続事業運営規程」を制定し、今後の活動における基盤を構築した。

「ライティングセンター」の設置

「ライティングセンター」設置に向け、管理者としての特任講師の雇用、他大学の視察、チューター採用制度の整備、各種設備の準備等を行い、平成 26 年 11 月に「ライティングセンター」を始動させた。

情報発信

平成 26 年 10 月に本事業 HP「高大接続」特設ページを開設、各種コンテンツを整備して、事業関連記事の掲載や学外に対する情報発信を随時行う場を設けた。さらに、平成 26 年 12 月に本事業紹介のためのパンフレットの作成、平成 27 年 2 月に平成 27 年度イベント紹介のためのリーフレットの作成を行い、高等学校関係者への配布や、重点連携校等への送付を通じて、事業内容に対する広報活動を行った。

平成 27 年 3 月 1 日から平成 27 年 3 月 15 日の期間に、マナビジョン（進研アド）の高校生向け受験サイトに本学の AP 事業に関する広告を掲載し、事業内容及び各種イベントについて周知を促した。

平成 26 年 11 月に実施された IELTS 対策講座と平成 27 年 1 月 5 日に開催された杏林 AP 推進委員会主催の「平成 26 年度 高校と大学をつなぐ FD / SD」の様子が、教育学術新聞で取り上げられ紹介された。

② 高等学校との連携

「AP ラウンドテーブル」の実施

高等学校との連携協議の場として、平成 26 年 10 月 25 日に「第 1 回杏林 AP ラウンドテーブル」（順天高等学校（SGH）、聖徳学園高等学校、三鷹中等教育学校、青梅総合高等学校が参加）を、平成 27 年 1 月 20 日に「第 2 回杏林 AP ラウンドテーブル」（順天高等学校（SGH）、聖徳学園高等学校、青梅総合高等学校、三鷹中等教育学校、関東国際高等学校、

大成高等学校が参加)を実施し、本事業の説明を行うと同時に有意義な連携の可能性を高等学校側と協議した。

「重点連携校」の選定と高大連携協定

平成26年10月に「重点連携校」として、8高等学校(聖徳学園高等学校、順天高等学校、三鷹中等教育学校、青梅総合高等学校、関東国際高等学校、大成高等学校、日出学園高等学校、神奈川総合高等学校)を選定し、平成27年3月13日に順天中学・高等学校と高大連携協定を締結した。

本学と連携高等学校合同の教員研修(FD)

平成27年1月5日に本学「杏林AP推進委員会」主催の「高校と大学をつなぐFD/SD」を三鷹キャンパス大学院講堂にて行い、教職員合わせて68名が参加した。(大学HPの記事掲載に伴い、日本私立大協会の新聞に掲載された。)聖徳学園高等学校の伊藤正徳校長と順天高等学校の中原晴彦国際部長が基調講演を行い、その後、入試方法も含めた活発な質疑応答が行われた。

高等学校訪問及び高等学校側からの訪問

平成27年1月から2月にかけて、ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室室長を中心に、神奈川県立総合高等学校、明星学園高等学校、日出学園高等学校、関東国際高等学校を訪問し、高大接続の展望や、具体的な接続のあり方等について議論を行った。また、平成27年2月に日出学園高等学校、関東国際高等学校、聖徳学園高等学校から訪問を受け、SGH申請に伴う協力体制の構築などについて協議を行った。

(2) 教育

③ 「ライティングセンター」の取組

「ライティングセンター」の開放

平成26年11月に「ライティングセンター」の教育支援内容を説明するガイダンスを行い、本学学生28名が参加した。平成26年12月に「ライティングセンター」を開放、授業の課題として出される英語での発表原稿作成やこれから留学を行う学生を対象とした留学先への申請書の書き方指導などに加え、各種英語における試験対策等の教育支援を開始した。また、「ライティングセンター」特任講師をサポートすると同時に、指導を通じて学びを得るという目的で、本学学生希望者からピアチューターを選定した。

「ライティングセンター」の活動

平成26年1月16日に、本学の協定校であるニュージーランドクライストチャーチポリテクニック工科大学の英語教員ニコラス・ワード先生による特別レクチャーを本学「ライティングセンター」にて開催した。

平成26年1月27日に、本学「ライティングセンター」担当教員であるバージニア・喜多特任講師が聖徳学園高等学校にて、アカデミック・ライティング・ワークショップの出張講義を行った。電子書籍システムと連動させたライティングセンターの閲覧資料であるeBookを、電子書籍システムを通じて高校生にも開放し利用を呼びかけた。

④ 「IELTS 試験対策講座」の実施

平成26年度11月より「第1回IELTS試験対策講座」を本学にて実施した。講師を招き、毎週土曜日に計6回の講座を開講し、本学学生24名及び高校生2名が講座を受講した。平成27年1月より「第2回IELTS試験対策講座」を本学にて実施した。講師を招き、毎週土曜日に計6回の講座を開講し、本学学生7名及び高校生22名が参加した。

⑤ 「日英中トライリンガルキャンプ」

平成 27 年 3 月 25 日から 26 日にかけて、本学学生と「重点連携校」である聖徳学園高等学校、関東国際高等学校の 1 年生・2 年生を中心に「日英中トライリンガルキャンプ」を八王子セミナーハウスにて実施した。「日英中トライリンガルキャンプ」には聖徳学園高等学校・関東国際高等学校などからの引率教員 3 名、高校生 18 名、本学学生 22 名（チューターとして参加、うち 7 名は留学生）、本学教職員 10 名が参加し、2 日間に渡り英語と中国語によるアクティビティーを行い、有意義な活動となった。

⑥ 「ループリック」の作成・運用

本学が「経済社会の発展を担うグローバル人材育成支援」事業にて作成した「グローバルループリック」及び「グローバルポートフォリオ」を参考に新たに「ループリック」を作成することが決定し、業者を通じて内容の精査を行ったうえで、本事業のための「ループリック」を作成した。また、上述の「日英中トライリンガルキャンプ」にて、参加した本学学生 22 名と高校生 17 名を対象に本事業における新たな「ループリック」の試験運用を行った。

⑦ 大学全体への波及

DNA 関連技術演習

「第 2 回杏林 AP ラウンドテーブル」での事業紹介を受けて、順天高等学校より要請があり、平成 27 年 3 月 11 日に順天高等学校の学生 26 名が杏林

大学八王子キャンパスを訪れ、保健学部 K 棟第一実習室において、教員 2 名の指導の下、本学学生 2 名のピアサポーターと共に DNA 関連技術演習等を受講した。

ベトナム研修に対するサポート

「第 1 回杏林 AP ラウンドテーブル」での事業紹介を受けて、聖徳学園高等学校より要請があり、平成 26 年 12 月に本学総合政策学部マルコム・フィールド教授が聖徳学園ベトナム研修にて本学学生及び高校生の指導を行った。また、その後、聖徳学園高等学校にて開催された「プレゼンテーション」イベントに招待され、本学総合政策学部の学生 8 名が高校生 200 名の参加する当該イベントにて健康啓発のダンスを行った。

聖徳学園主催「聖徳学園中学・高等学校インターナショナルミュージックフェスタ 2015」への留学生の参加

「第 2 回杏林 AP ラウンドテーブル」での事業紹介を受けて、平成 27 年 3 月 29 日に聖徳学園高等学校主催で行われた「聖徳学園中学・高等学校インターナショナルミュージックフェスタ 2015」へ本学学生が招待され、本学の中国人留学生在が二胡を演奏し高等学校側との交流を深めた。

補助事業における具体的な成果

(1) 全体

① 学内の基盤構築・関連施設の設置

学内の基盤構築

「大学教育再生加速プログラム (AP) 推進委員会」の設置により、学内で高大接続に関連する取組を推

進していく上での協議・意思決定機関が明確になり、事業実施に係わる全学的ガバナンスが構築された。「高大接続推進室」の設置により、従来より杏林大学が行ってきた高大連携の取組をより統括的に運営することが可能となり、本学学生に対する高大接続のセミナー、イベント、活動に関する周知が徹底され、その結果として、関連する取組への学生の参加を促進した。これにより、学生たちはトライリンガル人材になるという高い目標をもつ高校生との交流機会が増え、互いに刺激を与え合う貴重な機会を得ることができた。

「ライティングセンター」

高等学校での英語教授経験を持ち、非常勤講師としての教歴から杏林大学学生の英語力並びに特徴についても熟知しているバージニア・喜多氏を「ライティングセンター」の特任講師として雇用することで、学生たちが自身の能力及び目的に適したアドバイスを受けられる場としての「ライティングセンター」の基盤が整った。また、高大接続推進室専属の事務職員1名の雇用により、「ライティングセンター」設置に向けての準備が円滑に行われ、高校生並びに大学生の「ライティングセンター」活用開始に向け、設置場所の協議に加え、予約システム、登録用紙等の作成、また、特任講師をサポートするチューター学生の選定・トレーニング等が進められた。

情報発信

本事業特設サイト内に「学長挨拶」「高大接続について」「杏林大学の教育」「ライティングセンター」「関連のイベント・会議」等のコンテンツを作成し、本事業の目的・趣旨、事業の全体像、具体的な事業内容・実施計画、実施体制等を学内の教職員、学生に周知徹底するとともに、広く社会に広報していく基盤を整備することができた。

本事業特設サイトの開設、事業紹介パンフレットの作成・印刷・送付により、本学学生並びに連携高等学校高校生に本事業での予定プログラムの周知が徹底され、計24名の高校生による本学主催の「IELTS 試験対策講座」への参加、計6名の本学学生によるライティングセンターにおけるピアチャー

ターとしての訓練及び活動の開始、計22名の本学学生及び留学生と計18名の高校生による「日英中トライリンガルキャンプ」への参加等が実現した。

平成27年度実施イベントを紹介する「リーフレット」の作成・印刷・送付により、平成27年度の本事業の予定について、「重点連携校」に周知徹底を図るとともに、平成27年度の本学新入学生に対し本事業の概要及び主要プログラムの具体的内容について入学段階から明確に提示することが可能となった。

② 高等学校との連携

「AP ラウンドテーブル」の実施による高等学校との詳細な議論及び連携強化

「第1回杏林 AP ラウンドテーブル」において、本事業の概要や予定プログラムについて参加高等学校側から理解を得ることができ、「IELTS 試験対策講座」や「日英中トライリンガルキャンプ」など、高校生と大学生が共に参加するプログラムの本格的準備を開始することが可能になった。

「第2回杏林 AP ラウンドテーブル」にて「日英中トライリンガルキャンプ」の基本プログラムの告知が行われた際、「重点連携校」の教員から、英語と中国語のバランスをどうするのか、いかなる英語力を理想とするのかといった点について様々な意見があがり、本学参加学生はその内容を参考としつつキャンプの準備を行った。この過程で国際英語の重要性や英語 +1 としての中国語の重要性について改めて学生の意識が高まった。

重点連携校の選定・高大連携協定による連携強化

「重点連携校」の選定、順天中学・高等学校との高大連携協定の調印などを通じ、高等学校側と互いの要望等についてより綿密かつ継続的な協議を行うことが可能となり、本事業の各種取組を本学学生並びに連携高等学校高校生にとってより有意義なものとするための契機が得られた。高等学校との連携がさらに強化されることで、高校生による本学主催の

「IELTS 試験対策講座」や「日英中トライリンガルキャンプ」への参加が実現し、大学生と高校生が共に学び合い刺激し合う日英中トライリンガル人材を目指す若者のコミュニティの醸成へと結びついた。

本学と連携高等学校合同の教員研修 (FD)

「重点連携校」の高校教員による基調講演を通じて、本学教職員が現在の国際教育において何が重要か、グローバル市民育成のために何が求められているかについてより深く考察する契機が得られた。また、その内容を前提として、今後の連携を具体的にどう進めていくかについて活発な質疑応答がなされ、連携高等学校の高校生と本学学生の双方にとって有益なプログラムを考えていく上で有効となる情報交換を行うことができた。この試みを通じ本事業が周知され、新たに本学との連携を検討する高等学校が増加したことで、より多様な学生のニーズに応えられる高大接続の取組を実施できるようになった。

(2) 教育

③ 「ライティングセンター」の取組

「ライティングセンター」の開放

「ライティングセンター」の始動により、本学において「英語 III・IV」「英語作文」「ビジネスイングリッシュ」「ゼミナール」など、英語でのプレゼンテーションやエッセイライティングを求める授業を履修する学生が、授業の課題作成と連動する形で「ライティングセンター」を活用することが可能となった。これにより、トライリンガル人材を目指す留学希望者や留学帰国生等にとって留学準備や留学後のフォローアップの観点から有利となる環境が整備された。

ピアチューターに対する教育効果

「ライティングセンター」の特任講師をサポート

するピアチューターが公募制で選定された。当該学生チューターは書類審査並びに 30 分にわたる個人面接を経て採用され、採用後は特任講師よりサポートにあたるためのトレーニングを受けた。この採用審査とその後のチューターとしての業務を通じ、学生たちの英語ライティングに対する意識や能力が大いに向上した。さらに、「ライティングセンター」のバージニア・喜多特任講師が聖徳学園高等学校にて出張講義を行った際、フォローアップに本学学生のピアチューターがサポートという形で参加した。早期から留学を見据える高校生に刺激を受けると同時に高校生への指導を通じて自信を深めることで、チューター学生自身の意識もさらに高まった。

④ IELTS 試験対策講座の実施

2 回の実施を通じて、合計して 24 名の高校生が本学学生とともに「IELTS 試験対策講座」を受講した。参加高校生と本学学生がお互いに刺激を与え合うとともに、高校生と大学生が同じ空間で留学という同じ目的をもって学修に従事することで学びの連続性が強調され、参加者が高大接続の姿を具体的にイメージできる空間が作り出された。

また、IELTS 試験結果を教育的に評価し、それを参考とした高校教員との意見交換及び協力を行うことで、留学を目指す高校生・大学生に対しより長期的視野での一貫した学修指導を行うための一つの指標が得られた。

⑤ 「日英中トライリンガルキャンプ」

「第 2 回杏林 AP ラウンドテーブル」にて「重点連携校」の教員からあがった、英語と中国語のバランスをどうするのか、いかなる英語力を理想とするのかといった点についての意見を踏まえ、本学参加

学生 22 名（うち中国語圏からの留学生 7 名を含む）が約 1 か月前から 3 回にわたってミーティングを開催し準備を行った。この過程を通じ、国際言語としての英語の重要性や英語 +1 としての中国語の重要性について改めて学生が意識することとなった。キャンプの中核となるプログラムでは、参加高校生のグループに本学学生 1 名と中国人留学生 1 名が必ず加わり、高校生が中国の高校生活と日本の高校生活を比較するアクティビティに従事するのをサポートした。その結果として、高校生と大学生の間で活発なコミュニケーションが行われただけでなく、留学生を含む本学学生どうしの間でも有意義な交流が生まれ、まさに年齢や国境を超えた若者のコミュニティが実現した。また、英語圏留学帰国者や中国人留学生が実施したプレゼンテーションにより、参加高校生並びに本学学生が改めて留学の意義や難しさ、文化的差異などについて考える契機を得た。

⑥ 「ループリック」の運用

トライリンガル人材を目指す高校生と大学生が、高等学校と大学での学修成果を長期的な観点から一貫した基準で査定するためのツールとして本事業における「ループリック」を位置づけ、3 月実施の「日英中トライリンガルキャンプ」にて参加者全員に試験運用を行った。参加した本学学生 22 名と高校生 17 名が当日の活動やこれまでの学修に対する振り返りに基づき、高等学校と大学という枠組みを超えた形で「ループリック」による自己評価を実施した。

平成 27 年度以降、まずはこの「ループリック」を連携高等学校関係者に紹介し、試験運用の結果や高等学校関係者からのフィードバックに基づき、さらなる精緻化を図る。最終的にはトライリンガル人材を目指す高校生・大学生が所属する学校を問わず評価に使用できるような普遍的なツールとしていくことを目指す。

⑦ 大学全体への波及

事業取組学部の外国語学部だけでなく、保健学部や総合政策学部のリソースが高校生に対して開放される等、本事業の取組が大学全体へ波及することで、より多様な学生のニーズに応えられる高大接続の取組が実施可能となった。

IV. 事業実績の具体的内容

〈運 営〉

IV-1. 事業体制の確立

＝ 1 学内の基盤構築

杏林 AP 推進委員会の設置

本学に高大接続事業を推進するため、「大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会（通称「杏林 AP 推進委員会」）を設置した。この委員会は学長を委員長とし、以下、副学長、各学部長、高大接続推進室長、学園事務局長らの教職員で構成され、事業活動の遂行状況の把握、事業計画・活動の点検評価、その他高大接続事業に関する業務を司っている。

高大接続推進室と高大接続推進委員会の設置

高等学校・教育団体等との効果的な高大接続のための調査・企画・連携を推進することにより、高等学校と杏林大学の教育内容、教育方法、学習成果、入学選抜、単位認定等の接続・連携を行うことを目的として高大接続推進室を設置し、その中に高大接続推進委員会を組織した。この委員会は室長を委員長とし、各学部からの教育職員と大学事務部長らの事務職員で組織され、推進室運営に関わる基本的事項の審議および各学部間の調整を図っており、事務局を地域交流課（高大接続推進担当）に開設した。

＝ 2 「ライティングセンター」の設置

ライティングセンターの設置と特任教員の雇用

在学生在が長期の留学で専門分野を学ぶ際に必要となる英語のライティングについて指導を受けること

ができる学習施設としてライティングセンターを八王子キャンパスの国際交流プラザ内に設置し、そこに英語ネイティブ教員としてバージニア・喜多特任講師（常勤）を雇用し配置している。ライティングセンターの目的は、様々な学問分野や場面で学生の役に立つような「書く技術」を高めることにあり、在学生在は、自ら書いた英文について教員や訓練を受けたピアチューターから 1 対 1 の指導・アドバイスを受けることができる。なお、ライティングセンターは高校生に対しても門戸が開かれており、高大接続の場としても利用されている。

＝ 3 情報発信

本事業紹介パンフレット「One Step Ahead」の作成と配布

「日英中トライリンガル育成のための高大接続」紹介パンフレット「One Step Ahead」を 1,000 部印刷し、その内容を紹介するため主に東日本を中心に SGH の高等学校、SGH アソシエイトの高等学校、そしてグローバル教育に力を入れている高等学校、計約 100 校宛に送付した。

AP の特設ホームページの公開

杏林大学公式 HP トップページに「日英中トライリンガル育成のための高大接続」として専用バナーを設け、AP 特設ページを開設した。公開内容は主に「新着 NEWS」と「イベント・セミナー・会議」に分けて紹介し、随時更新を行った。

IV-2. 杏林 AP ラウンドテーブルの開催

開催日：第1回 杏林 AP ラウンドテーブル 平成26年10月25日（土）

第2回 杏林 AP ラウンドテーブル 平成27年1月20日（火）

目的

杏林 AP ラウンドテーブルは、連携高等学校関係者と杏林大学が高等学校から大学までの人材育成について意見交換をする場であり、本事業の中核的会議として位置づけられる。これまで高等学校と大学の関係は入学試験のみが接点となる場合がほとんどであったが、今後社会で求められるグローバルな視野と行動力、語学力をもつ人材を育成するため、杏林 AP ラウンドテーブルを通じて、教育活動や課外活動、そして教育・学修評価方法等について高等学校側と大学が意見を交換し、お互いのリソースを活用するためのプログラム内容について協議することを目的としている。

内容・実績

第1回 杏林 AP ラウンドテーブル

開催日：平成26年10月25日（土） 17:00

参加高校：聖徳学園高等学校、順天高等学校、三鷹中等教育学校、
青梅総合高等学校

開催場所：杏林大学医学部附属病院外来棟10階第一会議室

平成26年10月25日（土）第1回 杏林 AP ラウンドテーブルが開催された。聖徳学園高等学校、順天高等学校（SGH）、三鷹中等教育学校、青梅総合高等学校の4校を招き、大学側からは跡見学長を始め、AP事業に関わる教職員15名が参加した。

跡見学長の開会の挨拶に引き続き、11月1日より高大接続推進室長に就任予定の外国語学部稲垣大輔教授より、今回の採択プログラム「日英中トライリンガル育成のための高大接続」について紹介し、今後制度を整備予定のアドバンスト・プレイスメントについて海外の事例等も引き合いに説明がなされた。

意見交換の際に高等学校側からは「生徒自身にとってのメリットが明確でないと、平日の放課後に大学まで来て講義を受けるまでには至らないのではないか」、「私立高等学校の場合、その学校の取り組み方針に合った授業なりワークショップが受講できるようになると良い」、「IELTSの対策講座の開設はとても魅力的である」など忌憚のない意見が出された。

今回のラウンドテーブルで出された要望等を考慮し、杏林大学として今後どの様なプログラムが提供できるのか今一度検討することとなった。

第 2 回 杏林 AP ラウンドテーブル

開催日：平成 27 年 1 月 20 日（火） 18：00

参加高校：聖徳学園高等学校、順天高等学校（SGH）、青梅総合高等学校、
三鷹中等教育学校、関東国際高等学校、大成高等学校

開催場所：杏林大学医学部付属病院外来棟 10 階第二会議室

平成 27 年 1 月 20 日（火）第 2 回杏林 AP ラウンドテーブルが開催された。第 1 回目の参加高校である聖徳学園高等学校、順天高等学校（SGH）、青梅総合高等学校、三鷹中等教育学校の 4 校に加え、新たに関東国際高等学校、大成高等学校の 2 校を招き、本学 AP 事業の担当教職員と活発な意見交換を行った。

1、補助事業の各種プログラムにおける高校生募集について

AP 補助事業で行われる 1 月 31 日（土）からの IELTS 試験対策講座に高校生が既に 18 名申込があり、3 月に行われる日英中トライリンガルキャンプにも現時点で高校生 18 名の申し込みがある旨を報告した。両プログラムとも引き続き募集を行うため多くの高校生に参加いただきたいとの呼びかけを行った。

2、ライティングセンターについて

AP 補助事業で開設したライティングセンターの有効利用について、「高校生が、大学生チューターとともに、短期海外研修に出かける事前準備として必要となる、自己紹介、自分の家庭・学校・地域の紹介などのライティングを行う場として提供できる」と、本学のバージニア喜多特任講師が説明を行った。

3、本事業内容に関する意見交換

跡見裕学長の挨拶の後、高大接続推進室長の稲垣大輔教授より本事業内容が紹介され、高等学校の参加者より下記項目について忌憚のない意見や要望が発言された。

■ 日英中トライリンガルキャンプ

関東国際高等学校より「これまでこのような国境、言語、高校生・大学生という立場の枠を超えた交流

を探していたがなかなか見つからず、このキャンプは非常にありがたい」との意見が寄せられ、学生だけでなく高校教員にもぜひ参加させたいと申し出があった。

■ 海外研修

順天高等学校より「海外でのフィールドワークを順天高等学校の生徒は行っているが、外国人教員や専門研究分野などの資源が高校には限られており、この点で杏林大学の持つ資源を利用し、高大接続においてプロジェクトの共同開発・共同実施を期待している」との意見が出た。また、聖徳学園高等学校、順天高等学校より、「杏林大学がハブとなって海外研修のプログラムを複数の高校と共同開発して主催することで、高校生・大学生の交流と大学資源の活用となり、高校同士の交流が促進できるのではないかと提案があった。その他、青梅総合高等学校・三鷹中等教育学校・大成高等学校からは最近重視され始めた教育の 3 要素である思考力・判断力・表現力について海外研修における現状や問題などについて意見が述べられた。「この杏林 AP ラウンドテーブルでいろいろな情報を収集していきたい」との声もあがった。

■ 中国語教育

関東国際高等学校より「近年の日中関係が冷え込んでいることで、高校や大学で中国語を学ぶ学生が大きく減ってきている」と指摘があった。「一時的な政治状況に左右され、長い歴史のある日本の中国語教育を停滞させてはまずいので、杏林大学の日英中トライリンガル育成に期待している。そのためにも、高校からの中国語既修者の受け入れを大学でスムーズにさせていただくことが重要だ」との貴重な意見が寄せられた。

//// 効果・成果 //////////////////////////////////////

本事業で杏林大学が行おうとしている事項について高校側に理解を深めてもらうことができた。また、高校側のそれぞれの実情に基づいた意見や提案は、IELTS 対策講座と受験への高校生の参加や、日英中トラリンガルキャンプへの参加表明など、高校側に積極的に応じてもらえたことで今後の連携にむけて一層の協力が深まった。



第 1 回 杏林 AP ラウンドテーブル

IV－3. 高等学校との交流

高等学校を訪問

① 関東国際高等学校（東京都渋谷区）

訪問日：平成27年1月16日（金）15：30～17：00

訪問者：青柳貴徳地域交流課（高大接続推進担当）課長、
晝間大郎地域交流課（高大接続推進担当）課次長

対応者：黒澤眞爾副校長

主な話題：高校で中国語を学んだ生徒への大学での中国語接続教育等について

② 神奈川県立神奈川総合高等学校（神奈川県横浜市神奈川区）

訪問日：平成27年1月30日（金）15：00～16：30

訪問者：坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室長、青柳貴徳地域
交流課（高大接続推進担当）課長

対応者：菅原喜一外国語科教諭

視察内容：英語での授業風景見学、施設見学 その他

③ 日出学園高等学校（千葉県市川市）

訪問日：平成27年2月26日（木）14：00～15：30

訪問者：ポール・スノードン副学長、稲垣大輔高大接続推進室長、青柳貴徳地
域交流課（高大接続推進担当）課長

対応者：鳥尾克二監事、青木貞雄理事長、児玉尚樹法人企画室長ほか

主な話題：今後の高大接続の展望について

高等学校からの訪問

① 関東国際高等学校

訪問日：平成27年2月4日（水）15：30～17：00

訪問者：黒澤眞爾副校長

対応者：ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室長、宮首弘子外国語学部准教授、晝間大郎地域交流課（高大接続推進担当）課次長、青柳貴徳地域交流課（高大接続推進担当）課長

主な話題：SGH申請に伴う協力体制の構築について

② 聖徳学園高等学校（東京都武蔵野市）

訪問日：平成27年2月5日（木）10：00～11：00

訪問者：山名和樹国際交流センター長

対応者：ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室長、森芳久八王子事務部副部長、晝間大郎地域交流課（高大接続推進担当）課次長

主な話題：SGH申請に伴う協力体制の構築について

③ 順天高等学校（東京都北区）

訪問日：平成27年3月13日（金）14：00～15：00

訪問者：長塚篤夫校長、中原晴彦国際部長、島田洋子SGH事務担当者

対応者：跡見裕学長、ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室長、五十嵐一夫大学事務部長、森芳久八王子事務部副部長、青柳貴徳地域交流課（高大接続推進担当）課長、晝間大郎地域交流課（高大接続推進担当）課次長

催事：協定書締結式

IV-4. 順天高等学校との連携協定書調印

平成 26 年度に新たに連携協定を締結した高等学校は以下のとおりである。

- ・順天中学・高等学校（SGH 指定）東京都北区
尚、中高一貫校のため、協定上は中学・高等学校としている。
協定発効日：平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
双方から異議の無い限り毎年、自動更新される。

目的

高等学校とグローバル人材育成連携協定を締結し高大接続体制を整備・発展させてゆくことが、継続的な本事業の遂行の要となる。杏林 AP ラウンドテーブルや日英中トライリンガルキャンプなどに参加する高等学校と連携協議を行い、連携協定を締結することで相互の教育に係る交流・連携を通じて、高校生の視野を広げ、進路に対する意識や学習意欲を高めるとともに、大学の求める学生像及び教育内容への理解を深め、かつ高校教育・大学教育の活性化を図ることを目的とする。

内容・実績

杏林大学と順天中学・高等学校（東京都北区）は、3月13日（金）午後、杏林大学において高大連携の協定書に調印をした。三鷹キャンパス本部棟 11 階貴賓室で行われた調印式には、順天中学・高等学校から長塚篤夫校長、中原晴彦国際部長、島田洋子 SGH 事務担当者が、杏林大学からは跡見裕学長、ポールスノードン副学長、坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室長が出席し、それぞれの代表として長塚校長、跡見学長が協定書にサインし、

和やかな雰囲気の中で今後も連携を深めていくことを確認した。協定締結と同時に、今後取り組む活動は以下の通りとした。

- (1) 大学の授業科目への特別聴講生受け入れ
- (2) 大学の各種公開講座への聴講生受け入れ
- (3) 大学の実験実習施設での実験技術研修の受け入れ
- (4) 大学教員による高等学校への出張講義
- (5) 教育についての情報交換及び交流
- (6) その他、双方が協議し同意した事項

効果・成果

平成 26 年度において順天高等学校は、2 回の「杏林 AP ラウンドテーブル」へ参加し、「高校と大学をつなぐ FD / SD」における順天高等学校からの講演者の登壇、IELTS 対策講座への参加、波及効果として高校生に対する DNA 関連技術実習の杏林大学保健学部での受け入れ、など実質的に本学と幅広い高大接続を行ってきた。その実績をもとに連携協定の締結に至った。来年度以降も、意見交換、双方の要望への対応、本事業で行うイベントへの参加が継続して行われる予定である。



連携協定締結

できてとても新鮮だった」などの感想が寄せられ、見学した高校教員からは、「とても充実した内容のキャンプだったので、次年度も継続してほしい」、「生徒たちが真剣に取り組んでいる姿を見ることができてとても感動した」という意見や感想が述べられた。また、ピアチューターとして参加した留学生を含む本学学生は、参加高校生のグループに加わり、高校生が中国の高校生活と日本の高校生活を比較するアクティビティに従事するのをサポートすることで、高校生と大学生の間で活発なコミュニケーションが

行われただけでなく、留学生を含む本学学生どうしの間でも有意義な交流が生まれ、まさに年齢や国境を超えた若者のコミュニティが実現した。

また参加した本学学生 22 名と高校生 17 名が当日の活動やこれまでの学修に対する振り返りに基づき、高等学校と大学という枠組みを超えた形で本事業のループリックによる自己評価を実施することができた。



英語による発表準備



中国人留学生へのインタビュー



八王子セミナーハウスにて

IV – 6. Writing Center 2014-2015 Report

Writing centers have become ubiquitous in higher education settings in North America, as well as in much of Europe. More recently, writing centers have become a part of many Japanese universities. The 2014-2015 academic year marked the beginning of the Kyorin University Writing Center. As this is the university's first self-access learning center, it was necessary to build it from the ground up. Thus, our activities this year consisted mostly of planning, preparation, and launching. Early on, it was decided that our goal was to open the center before the end of the fall semester. By opening on a small scale towards the end of this year, we could work through any difficulties and be in a better position to begin operations in the 2015-2016 academic year.

Initial plans for staffing, furnishing, and equipping the Center were developed and carried out in the fall of 2014. Special Lecturer Virginia Kita was hired to see to the daily activities of the Writing Center. After much consideration, a space for the new facility was designated at the Hachioji Campus. During the month of November, biweekly information sessions were carried out during lunchtime. These information sessions served two purposes: 1) to introduce the concept of a writing center, 2) to advertise the part-time job of peer tutor. A total of 31 people, including one faculty and two staff members attended these sessions. Most of the students who attended were English majors, and 17 of them expressed interest in the part-time job of peer tutor.

The next step was to consider potential candidates for the newly created position of peer tutor. Six students were eventually selected based on interviews, writing samples, faculty recommendations, and an application form. All successful candidates were English majors who showed considerable enthusiasm for writing and communicating with others. They would all become 3rd or 4th year students in the upcoming

academic year.

In addition to the preparations described above, visits were made to other university writing centers. Two visits were arranged to the Waseda University Writing Center, which was one of the first writing centers in Japan. The initial visit involved a meeting with their director and several staff members to learn about their experience and receive some first-hand advice. A follow-up visit provided an opportunity to observe and participate in one of their tutor training meetings. A visit to Soka University's writing center included a thorough tour of the facilities and a chance to ask questions about procedures. The three visits provided insights that helped decide the writing session goals, the hiring process for tutors, and more for Kyorin University's center.

Due to the difficulty of coordinating the schedules of various contractors and service providers, construction of the writing center was somewhat delayed. Thus, the opening that had been tentatively planned for November was pushed back to December. Although it may have been better to start the writing center in its permanent space, operations began instead in the library. Initially, hours were limited and peer tutors were not active in the sessions (due to the need to train the tutors first).

Peer tutors' introductory training was completed in early January, and operations officially began on the 13th with an open house party to mark the occasion. Visiting instructor Nicholas Ward, of Christchurch Polytechnic Institute of Technology (New Zealand), gave a lunchtime lecture on January 15th. The topic of the lecture was the corrective feedback given on writing assignments at CPIT. This interactive lecture was held at the writing center, with eight students and several faculty and staff members in attendance.

Although classes were finished by the end of

January, the writing center remained open through the first half of February to help students going on short-term study abroad programs. Students going to Los Angeles worked on letters of introduction to their host families, while students going to Oxford wrote a series of short speeches. The 23 writing sessions with these students allowed the newly trained peer tutors to gain experience and confidence.

Peer tutors were able to further develop their tutoring skills through interaction with Shotoku Gakuen High School students, who visited the writing center on February 10th. The four students and their teacher came to the writing center to experience the campus environment and have the experience of getting peer feedback on their academic writing. Before the high school students arrived, the peer tutors had a mini-training on how to best meet the high school students' needs.

Ms. Kita had visited Shotoku Gakuen High School once before this meeting, and she made two additional visits to the school to help students complete their research papers.

March was a time of reflection and additional planning aimed at improving operations for the upcoming academic year. Five peer tutors were retained (one graduated), and several documents used in the center were revised. The books acquired through the grant were catalogued, arranged, and a system for checking them out was set up and advertised. It is hoped that students will make use of many of the titles for self-study. Other books will be used by peer tutors both during and outside of writing sessions. They will also be used to design tutor trainings. Finally, it is hoped that faculty members will consult the books on the topics of writing, rubrics, intercultural communication, and portfolios, among others.



ライティングセンター 利用風景

IV-7. IELTS 対策講座と試験実施を高校生にも開放

実施日：第1回 平成26年10月18日(土)～平成26年12月6日(土)

第2回 平成27年1月31日(土)～平成27年3月7日(土)

目的

英語学習に意欲的な高校生に英語検定試験とその対策講座を開放することで、大学での学びに向けた語学力の確認を目的とする。

内容・実績

10月18日(土)～12月6日(土)にかけて本学八王子キャンパスE棟の教室において、第1回 IELTS 対策講座が実施され、本学在學生とともに熱心な高校生2名が受講した。また1月31日(土)～3月7日(土)にかけては、三鷹キャンパス看護・医学教育研究棟の教室を借りて第2回目の高校生向け IELTS 対策講座が実施され、約20名の意欲

的な高校生が参加した。

この講座は、高大接続の観点から IELTS の試験を受験希望する高校生に対し、IELTS を主宰する日本英語検定協会の講座対策プログラムを、民間から派遣された試験対策特別講師が大学の教室で行うというものであった。第1回目は計7回、第2回目は計6回毎週土曜日の同じ時間に開催された後、平成26年12月13日(土)と平成27年3月28日(土)にそれぞれ本番の試験が実施された。

効果・成果

対策講座の受講で留学の資格条件に課される試験のための英語力を向上させ、検定試験受験に至る学習意欲を継続できた。



平成26年10月 講座(八王子キャンパス)



平成27年1月 講座(三鷹キャンパス)

IV-8. 高校と大学をつなぐ FD / SD

「平成 26 年度 高校と大学をつなぐ FD / SD」杏林 AP 推進委員会主催

日 時：平成 27 年 1 月 5 日（月）14：00～15：30

場 所：三鷹キャンパス 大学院講堂

テーマ：「平成 26 年度 高校と大学をつなぐ FD / SD」

講 演：「つなぐ力、つながる力－高校教育における外部連携の可能性」

聖徳学園高等学校校長 伊藤 正徳 先生

「日本のグローバル化と高校教育」

順天高等学校国際部長 中原 晴彦 先生

目的

FD / SD は大学の教育と運営に関し、今や必須のものとなっている。今回の FD / SD では、大学教職員が高校教育の現状に理解を深め、特に高校でのグローバル化に対応する教育や外部連携について高校側の取り組みを知ることで、杏林大学における「日英中トライリンガル育成のための高大接続」事業推進の一助にする。

内容・実績

平成 27 年 1 月 5 日（月）に杏林 AP 推進委員会主催の「平成 26 年度 高校と大学をつなぐ FD / SD」が本学三鷹キャンパス大学院講堂で行われ、70 名弱の教職員が参加した。

稲垣大輔高大接続推進室長の司会で、跡見学長の挨拶の後、聖徳学園高等学校の伊藤正徳校長が「つながる力、つなげる力 高校教育における外部連携の可能性」と題して、つづいて順天高等学校の中原晴彦国際部長が「日本のグローバル化と高校教育」と題して講演を行なった。

伊藤正徳先生は、まず、青少年意識調査（内閣府）結果から、日本の若者の自己肯定感が低く不安感が他国に比べ高いことを指摘し、決められた知識や技能を授けるだけの減点方式の教育を問題とした。21 世紀型の学びは International Baccalaureate (IB) などで示される新しい学習者像をもとにしたアクティブラーニングが重要だとし、そのための基礎知識を高校で学ぶことが必要だとした。そしてロールモデルとしての社会企業家を引き合いに、聖徳学園

では OECD PISA キーコンピテンシーと同様な「人とつながる」「知識をつなげる」「世界とつながる」の 3 つのつながる力の育成に力を入れていると紹介した。

そのためには高校の中のみでの教育には限界があり、実績を積んできた杏林大学との連携、地域との連携、そしてローカルからグローバルへ飛躍といった実践例を紹介した。杏林大学との連携では、例えばオランダ大使の聖徳学園での講演にスノードン副学長が同席したことやフィールド教授のグローバルセミナー出張講義などが、また地域との連携では新潟県阿賀町での農家宿泊・物産展開催や武蔵境活性化委員会との連携などが紹介された。グローバル人材育成を視野に入れた留学先として、アジア諸国を視座に行先を開拓しているとのことである。そして本学の高大接続には、多くの高校、地域、海外と結ぶハブまたはコアとしての役割を期待していると締めくくった。

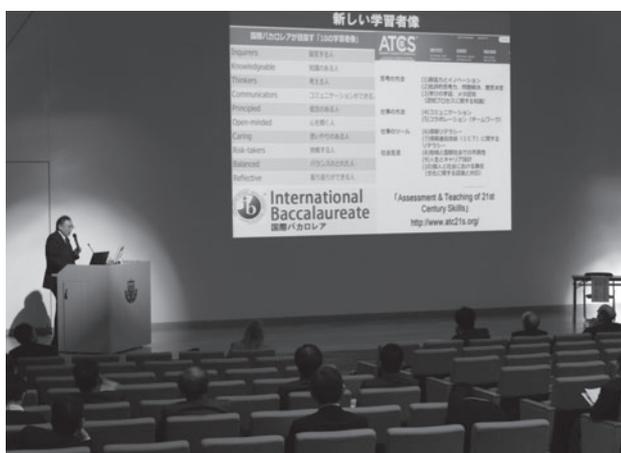
続いて、中原先生は 180 年も昔に遡る理系の私塾としての順天高等学校の歴史から話を始め、明治維新、終戦、現代のグローバル化という 3 つの開国の中で、日本人は外圧を能動的に変換してきた点を指摘した。順天高等学校では 1964 年の東京オリンピックの年から高校生の海外派遣が始まり、現在では海外修学旅行で生徒全員に拡大しているそうである。1980 年代のジャパン・アズ・ナンバーワンの時代には、多くの在外教育施設が日本人子弟向けに設立されたが、そのかなりがバブルの崩壊とともに閉鎖された施設も多いことを、自身も勤務していた経験に基づいて話した。当時と現代のグローバル化の時代との対比で、経済戦士を支えるための教育から、

不調な経済を革新していける人材育成が教育に期待されていると話した。SGHに指定されている順天高等学校では保護者から英語教育について質問されることも多いようである。しかし文部科学省もSGH指定の概要で、英語力とか経済戦士を育成することを求めているわけではなく、問題解決力やコミュニケーション力等の国際的素養を備えたグローバル市民の育成を求めていると語った。そして、最後にIB Learnerのプロファイルの最初に示されている「探究する人」の育成のため高大接続が重要であると締めくくった。

その後の質疑応答では、入試方法なども含め活発なやり取りがされ、最後にスノードン副学長が、周到な準備をされた両氏の講演に謝辞を述べ閉会した。

//// 効果・成果 //////////////////////////////////////

このFD / SD参加者へのアンケートにより、参加者の様々な意見が寄せられ、今後の本事業の展開への参考とすることができた。また、私立高校等では、グローバル化対応や地域連携を含め多様な取り組みを行っていることもわかり、大学教育でそれ以上の体験学習等を提供できるかどうか大学教育再生の重要な鍵になると考えられる。そして「高校と大学をつなぐFD / SD」を通じ本事業が周知され、新たに本学との連携を検討する高等学校が増加することに伴い、より多様な学生のニーズに応えられる高大接続の取組を実施できるようになった。



聖徳学園高等学校校長 伊藤 正徳 先生



順天高等学校国際部長 中原 晴彦 先生



質疑応答の様子

IV-9. ルーブリックの作成と試験的实施

目的

本事業においては、高校段階で修得すべき英語・中国語の能力に加えて、グローバル人材としての資質、大学で修得すべき能力・資質を可視化したうえで、いかに効率的・効果的に高大接続をしていくかを検討・実施するかが課題である。必要とされる能力や資質を可視化するための学修成果測定法としてルーブリックを導入することで、アドバンストプレイメントや、大学教養レベルのグローバル関連科目を高校生に開放する一連の教務的制度構築の要素とすることを目的としている。

内容・実績

1. 作成にあたっての指標

ルーブリックの作成に当たり、平成26年12月22日に中央教育審議会から答申された「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」の中に書かれている「確かな学力」を特に参考とした。すなわち、「主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）」および「知識・技能を活用して、自ら課題を発見してその解決に向けて探究し（課題発見と解決能力）、その成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力（思考力・判断力・表現力）」を指標の中心に据えた。

2. ルーブリック作成の背景

文部科学省がアドミッションポリシー（入学者受入れ方針）とディプロマポリシー（学位授与方針）の厳格化を義務付け、入試改革を積極的に推進し、大学ごとの特色を出す教育をすることで学生の質を確保する狙いを明確に打ち出した。特に今回のルーブリック策定は、アドミッションポリシーに基づく多面的評価を重視した個別選抜の確立に寄与することを目標としている。入試改革で提唱されている「確かな学び」は一定の学力評価で測定することは可能であるが、「生きる力」については、試験等の評価方法のみで測定することが困難である。その「生きる

力」を多面的に評価し個別選抜を量的に実施するための指標がルーブリックであると認識している。

本事業では、多面的評価の項目を8項目に細分化し量的に評価することが可能なルーブリックを策定した。その評価項目は文部科学省、中央教育審議会、スーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）の評価基準などを参考にしている。尚、本ルーブリックは、新たな大学入学者選抜として高校生を評価するための指標に留まらず、グローバル社会で勝ち抜くための道標として、全国の高等学校などの教育機関で生徒を育成する方向性を示すための共通基準の役割を担うことができるものとなるよう改良を進めていく。

3. ルーブリック作成及び実施

本事業におけるルーブリック作成にあたり「生きる力」の前提や「語学4技能」の前提、ルーブリックの活用性、また「生きる力（多面的能力指標）」と「語学4技能（言語能力指標）」の各指標と評価基準を検討・協議したうえでルーブリックセルフチェックシートを作成し、本事業で行った「日英中トライリンガルキャンプ」に参加した高校生と本学学生に試験的に実施した。

効果・成果

今回作成したルーブリックセルフチェックシートは、本事業で平成27年3月に行った「日英中トライリンガルキャンプ」にて参加した本学学生22名と高校生17名を対象に実施した。ルーブリックの自己評価の仕方について説明をしながら、約30分をかけ「生きる力（多面的能力評価）」と「語学4技能（言語能力評価）」のそれぞれに回答してもらった。高校生、本学学生ともおそらくこのような自己評価は初めてのことであり、多少の戸惑いはあったが、大方の学生は形式的には適切に回答ができた。しかし、自分の経験を選ぶ際に、体育祭や文化祭、クラブ活動、学校で行く海外研修などを選んだ学生が多かった。「主体性」「多様性・協働性」「問題発見・解決力」「結果を出す」を評価するにあたって客観的評価者から見ると、評価しづらい点があることが分かった。

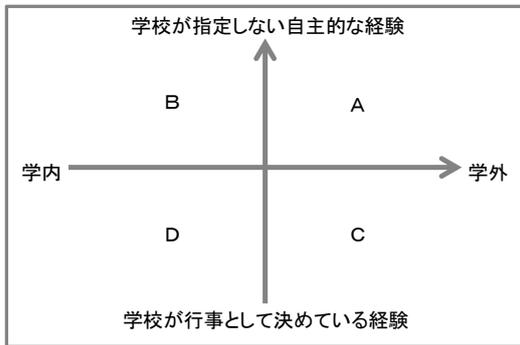


■ルーブリック策定「生きる力」における前提

評価の前提として、高校時代の経験を下記セグメントに照らし合わせます。その中で「語学力(4技能)」以外の能力をどう発揮してきたのかを自己評価できる指針の策定をしました。語学力に関しては何らかの経験が起因する場合がありますが、学業のみで一定の技能を身に付けることが可能なため、全てを経験に結びつける必要はないと考えます。(確かな学力に起因)

下記のセグメントで経験を捉えた場合、経験の質に差が生じます。経験の質に合わせたバランス補正値を設定することで、最終的なルーブリック評価の数値は変化させることができます。

尚、経験の定義は「単なる遊びではなく、本気で力を注いで頑張ったことで、自己成長(もしくは他者への貢献)に繋がる経験」とします。オンラインゲームで自発的に楽しんだ、自発的に友達と一緒に旅行に行った経験などは、経験に当てはまりません。詳細につきましては、下記の文言をご参照ください。



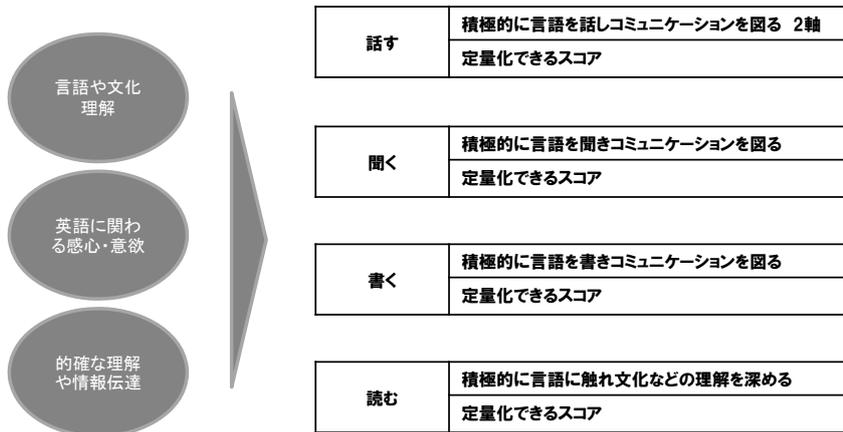
また、ルーブリック評価は「高校生の自己評価」となります。次々項の選考イメージでご確認いただけますが、選考における参考資料という位置付けが前提になると認識しております。

	校内	学外
学校が指定しない自主的な経験	Bセグメント 部活動、委員会活動(学級委員長)、応援団員など学校行事としての強制力がなく、自発的(もしくは推薦されて引き受けた経験含)に取り組んだ経験を指します。	Aセグメント 自主留学、授業以外の学習、地域活動、ボランティア、コンテストへの参加など、学校行事としての強制力がなく、自発的に(他者から紹介された経験含)に取り組んだ経験を指します。
学校が行事として決めている経験	Dセグメント 合唱コンクール、体育祭、文化祭など、予め学校の年間スケジュールに入っている学内行事を指します。	Cセグメント 海外研修、修学旅行、実習、施設見学、ボランティアなど、予め学校の年間スケジュールに入っている学外行事を指します。

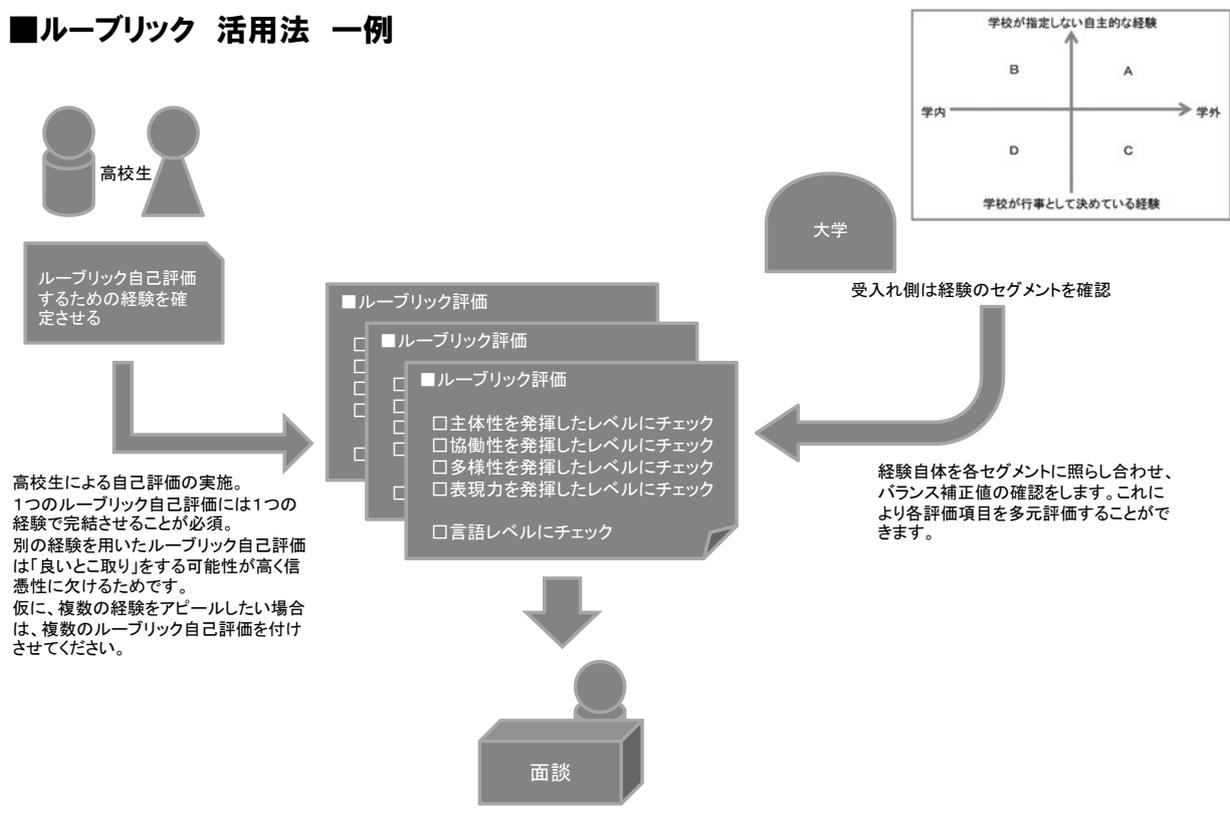
■ルーブリック策定 「語学4技能」における前提

国立教育政策研究所、教育課程研究センターの「評価規準の作成、評価方法などの工夫改善のための参考資料(高等学校 外国語)」の資料によりますと、学習指導要領の目標の実現では、大きく3つの柱から成り立っています。

よって、この柱を基準にし、語学全体ではCEFRのグローバルスコアと、4技能に関してはCEFRのセルフアセスメントガイド、日本英語検定協会の基準を参考に策定するものとします。



■ルーブリック 活用法 一例



■ループリック評価シート 暫定版「生きる力」

	1	2	3	4	5
主体性	指示されたことに対して、うっかりして忘れることもあるが、責任者の指導の下、期限までやり切る。	指示されたことは、乗り気ではなくても最低限やり切る。	指示された内容が、特にやりたいことではなかったとしても、やるからには自ら高い意識を持って行動する。	自らが意識を高めて情報を取捨選択できる状況判断力を持ち、そしてその判断に責任を持って率先して行動する。	自らが意識を高めて情報を取捨選択できる状況判断力を持ち、そしてその判断に責任を持って率先して行動する。また、その行動は第三者が評価しても創意工夫があると判断されるものである。
多様性協働性	自らが所属するクラスやチームなどの目標を理解し、仲間に対しては波風を立てないような姿勢で取り組むことができる。	自らが所属するクラスやチームなどの目標を理解し、仲間から与えられた役割に対しては全うしようと行動することができる。	自らが所属するクラスやチームなどの目標に向かって、やるべきことを理解した上で積極的に協力することができる。また、そのプロセスで、すべての他者ではないが認め合いながら行動することができる。	自らが所属するクラスやチームなどの目標に向かって、役割に責任を持って貢献することができる。また、そのプロセスで、仲の良さ悪しに関わらず価値観の違いを受け入れ目標に向かうことができる。	自らが所属するクラスやチームなどの目標に向かって、役割に責任を持って貢献することができる。また、そのプロセスで、様々な年齢や国籍、文化で過ごしている他者の価値観を受け入れて目標に向かうことができる。
問題発見解決力	課題を捉えることができる。促せば解決に向かう行動を取ることができる。	積極的に課題に立ち向かい、情熱を持って解決しようとする行動を取ることができるが、その課題を解決すれば新たな課題が生まれる傾向にある。	自身の力で起こっている現状を見極め、本質的な課題を捉えるように心がけているが、その課題の捉え方は、まだ不十分な場合もある。	自身の力で起こっている現状を冷静に見極め、本質的な課題点を捉えられる。なぜその課題が出たのか？どうすれば解決できるのか？を掘り下げることで、具体的な解決策を導き出し、改善する行動を起こすことができる。	自身の力で起こっている現状を冷静に見極め、本質的な課題点を捉えられる。なぜその課題が出たのか？どうすれば解決できるのか？を掘り下げることで、具体的な解決策を導き出し、改善する行動を起こすことができる。また、この状況を的確にメンバーに伝え共有することで一人では出せない価値の創出ができる。
結果を出す	大会への参加	県大会出場	県大会ベスト4～2位	全国大会出場レベル～16位	全国大会ベスト8～優勝

■ループリック評価シート 暫定版「語学力」

	1	2	3	4	5
対話力	ごく簡単な単語を用いて自分の気持ちなどを伝えることができる。ただし、正しい文章にすることはできない。	相手にゆっくり話してもらい手助けを借りながらであれば、自分の気持ち程度の簡単なやりとりをすることができる。	家族のことや住んでいる地域のことなどの身近な話題であれば、単語やワンセンテンスレベルではあるが、ゆっくりやり取りすることができる。	その言語が話されている地域への旅行中に起こるようなことに対し、大体は適切に対処することができる。興味があることや身近な話題であれば、会話に入っていくことができる。	ネイティブスピーカーが相手であっても、ある程度流暢かつ自然なコミュニケーションを図ることができる。理解のある話題であれば、自身の意見を交えながら、積極的に会話に加わることができる。
プレゼン	挨拶など一言程度であれば話することができる。	自己紹介など定型的な内容であれば話することができる。	身近な話題について、ごく短い文章で話することができる。	自身の経験、夢、希望などの比較的身近な話題について、ごく簡単な表現で文章を繋ぎながら説明することができる。また、自身の意見に対し平易な表現ではあるが、理由付けや補足説明を行うことができる。	自身が興味・関心のある話題であれば、明確かつ詳細に説明することができる。意見の分かれ得る時事問題について、利点や欠点を挙げながら自らの見解を説明できる。
聞く	ゆっくりはっきりと発音されるごく簡単な単語程度であれば理解できる。	日常の挨拶など、習慣的に使う言葉は認識することができる。ゆっくり、はっきり話をすれば、ワンセンテンスレベルの内容であれば理解できる。	自身や家族のことなど身近な話題に関する簡単な表現であれば理解することができる。短く単純な内容であれば要点をとらえることができる。	日常生活の中で頻りに耳にする平易な言い回しであれば、要点を理解することができる。時事問題や興味がある話題であれば、ラジオやテレビ番組の要点を理解することができる。ただし、比較的ゆっくり、明確に発音されるものに限る。	なじみの深い分野であれば、スピーチや講義を大部分を理解し、複雑な話の筋道を把握することができる。ニュース番組や時事問題に関する番組の大部分を聞き取ることができる。くせのない発音であれば映画のストーリーを大体理解することができる。
書く	ごく簡単な単語程度なら書くことができる。	ある一定の定型文なら書くことができる。例えば住所や挨拶などの慣用句、必要事項に挙げられる個人情報などがそれに当たる。	自分の気持ちを、単純で短い文章ではあるが、書くことができる。	興味のあることやなじみ深い話題であれば、単純なつながり合わせの文章を書くことができる。事実や感想を手紙に書くことができる。	興味のあることであれば、明確かつ詳細な文章を書くことができる。特定の立場に立ち、情報を伝えたり根拠を示すレポートを書くことができる。事実の描写にとどまらず、伝えたい点を強調しながら手紙を書くことができる。
読む	ごく簡単な単語程度なら読むことができる。	ある一定の定型文なら読むことができる。例えば挨拶などの慣用句や駅の表示などなら理解することができる。	ごく単純で短い文章を理解することができる。日常生活でよく目にする広告やメニューなどに使われる定型的な表現を理解できる。	日常的な文章であれば理解することができる。例えば、個人的な手紙において内容や書き手の心情を理解することができる。	社会問題に関する記事やレポートを読み、書き手の意見を理解することができる。小説など読んで理解することができる。
実用英語検定スコア	5級レベル相当	4、3級レベル相当	準2級レベル相当	2級レベル相当	準1級レベル相当

〈波及効果〉

本事業は外国語学部を中心とする取組であるが、高大接続・高大連携を全学的に波及させることも目標の一つである。杏林大学では、大学教育全般に関して全学的な第3次中期計画実行委員会を設けているが、その中の「大学の機能強化」項目のなかに「高大連携実行部会」がある。本事業が採択される以前から、高大連携実行部会を中心に全学的に高大連携を進めてきたが、今後は本事業の高大接続と中期計画との有機的連動を進めることが必要とされ、平成26年度は総合政策学部における聖徳学園高等学校主催のベトナム研修へのサポートと、保健学部における順天高等学校生徒に対するDNA関連技術演習を実施した。その結果として高校側は、高校のみではできない学習指導を杏林大学のリソースの協力を得て行うことができ、また杏林大学も高校側の多様な課外教育の実態に認識を深め、本事業での活動が全学的な波及効果へと繋がり、高大接続・高大連携による協力も緊密となった。

IV-10. 聖徳学園高等学校のベトナム研修で総合政策学部教授が現地指導

日 時：平成26年12月15日（月）
場 所：ベトナム、ハノイ市
担 当：Malcolm H. Field 教授（総合政策学部）

目的

Throughout the 2014 academic calendar, Kyorin University and Shotoku Gakuen have been cooperating on a regular basis. Students at Shotoku High School made a club under the leadership of a teacher and the school counsellor. The Vice President, Paul Snowden, and/or I would visit the school and work with the students.

内容・実績

As part of that cooperation, I joined the Shotoku High School students' Viet Nam educational tour program in December 2014. I accompanied the students' visits to the JICA offices in Hanoi, where we had a meeting discussing JICA's projects in Viet Nam, and to a countryside "cultural village", where the students were able to enjoy traditional singing and costumes of people from the north of Viet Nam, get their hands "dirty" by picking corn and other vegetables grown in garden plots, and enjoy a plentiful feast of local foods.

効果・成果

I found the Shotoku High School students to be enthusiastic, adventurous, and willing to listen to and engage with the new ideas and environment. I found their attitudes refreshing. I believe it was a valuable experience for the students and I would encourage more hands-on study tours to Viet Nam and other Southeast Asian and African countries.



IV-11. 保健学部における順天高等学校生徒に対する DNA 関連技術演習の実施

日 時：平成 27 年 3 月 11 日（水）
場 所：保健学部 K 棟第一実習室
参加者：順天高等学校 S クラス 1 年生 27 名
名取慶教諭（順天高等学校）、熊木幸司教諭（順天高等学校）、
山崎碧教諭（順天高等学校）、相磯聡子准教授（杏林大学保健学部）、
Dhashaka Sivasuriam 講師（杏林大学保健学部）、実験補助者
（杏林大学保健学部 2 年生 2 名）

目的

基礎的な大学での生物学実習を体験することで、TRI Program の概略を理解し、TRI Program の中で使用する機器に慣れ、またその中で使用する英単語に慣れること等を目的としている。

内容・実績

今回の演習は、順天高等学校と杏林大学との高大連携の一環として本学八王子キャンパスにて実施された。来校したのは、順天高等学校 S（サイエンス）クラスの 1 年生で、この夏休みには TRI（オーストラリア生物医学研究機関）での海外研修に参加することになっている。生徒たちは実習室に到着するとまず実習用の白衣に着替え、生体検査学研究室の相磯聡子准教授から諸注意を受けた後、早速 TRI で行う実験の概要（予想）を受講し、医療英語学研

究室のダシャカ・シーヴァスリアム講師から基本用語の確認の講義を受けた。午後からは、マイクロピペットやマイクロ遠心機を用いた演習、各実験プロトコルの確認、専門用語（英語）の使い方、アガロースゲルへの試料の添加演習、電気泳動のデモ、英語による指示の聞き取り練習が行われ、生徒たちはいずれも真剣な表情で熱心に取り組んでいた。

効果・成果

参加した生徒からは「最初は不安だったけれども、事前にこの演習を受講してとても勉強になった」、「今日英語の専門用語を耳にし、聞き取り練習も行ったが、オーストラリアでの研修前にもっと英語力をつけるために勉強しておきたい」などの感想を聞くことができ、今回の演習を実施することにより高大連携の活動により広がりが持てた。



実験研修の様子（八王子キャンパス）

IV-13. WEBを使った広報

目的

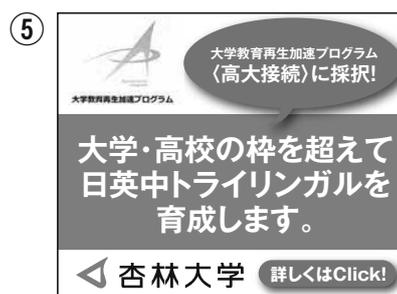
本事業を高校生及び高校教員に広く知ってもらうため、高校生の進路・進学を応援するサイトであるベネッセのマナビジョンに本事業のバナー広告を掲載した。

内容・実績

このサイトは大学受験をする高校生及び高校教員が全国的に閲覧しており、大学情報、学習情報、入試情報、キャリア情報等を得ることができる。このサイトのトップページにバナー広告を張り、「日英中トライリンガル育成のための高大接続」の全国的な広報を行った。掲載期間は平成27年3月1日(日)から平成27年3月15日(日)までであった。

効果・成果

広告掲載期間中にマナビジョンのインプレッション数(表示回数)は約41万7000回であり、そのうちスマートフォンからのものは約6万7000回であった。かなりの高校生や高校関係者の目に留まったと考えられる。



IV-14. マスコミ取材

10月～11月にかけて実施されたIELTS対策講座と1月5日（月）に開催された杏林AP推進委員会主催の「平成26年度 高校と大学をつなぐFD/SD」の様子が、教育学術新聞で取り上げられ紹介された。

杏林大学は文部科学省の「教育再生加速プログラム・テーマⅢ（高大接続）」に採択された。その事業の一環として、まず、イギリス英語圏向けの留学のために必要となるIELTS試験の対策講座を、高校生と在学生向けに行う。周知期間が短かったにもかかわらず、十一月から在学生に混じり高校三年生が毎土曜日に同大を訪れ、午前午後後に三時間、ネイティブ講師による対策講座を受けて将来の留学に備えている。



IELTS受験対策講座を高校生に提供

杏林大学

平成27年1月14日教育学術新聞

これに続く第二弾として、教育連携協定を締結

した高校など日程調整し、主に高校生向けのIELTS受験対策講座を平成二十七年二月から三月にかけて六回ほど開催。そして三月には高校生と同大の英語圏・中国語圏からの留学生を交えた宿泊キャンプで異文化交流を行う予定である。

早期の留学試験準備が、留学の早期化や長期化というグローバル人材を目指すとする高校生たちとの大学での学びの先取りとなり、大学での学習目標の設定や学習意欲の喚起につながる事が期待される。

高校と大学をつなぐFD/SD 杏林大学が開催



左より聖徳学園高等学校の伊藤正徳校長、順天高等学校の中原晴彦国際部長

杏林大学では、一月五日、同大学AP推進委員「FD/SD」が行われ、七〇名弱の教職員が

参加した。跡見 裕学長の挨拶の後、聖徳学園高等学校の伊藤正徳校長が「つながる力、つなげる力、高校教育における外部連携の可能性」と題して、続いて順天高等学校の中原晴彦国際部長が「日本のグローバル化と高校教育」と題して講演を行った。伊藤氏は、まず、内閣府の青少年意識調査の結果から、日本の若者の自己肯定感が低く不安感が他国に比べ高いことを指摘し、決められた知識や技能を授けるだけの滅点方式の教育を問題とした。二十一世紀型の学びは国際バカロレア（IB）などで示される新しい学習者像をもとにしたアクティブラーニングが重要だとし、そのための基礎知識を高校で学ぶことが必要だとした。そしてロールモデルとしての社会企業家を引き合いに、聖徳学園ではOEC D PISA キーコンピテンシーと同様な「人」とつながる「知識をつなげる」「世界をつなげる」の三つのつながる力の育成力を入れていると話した。そのためには高校教育だけでは限界があり、実績を積んできた同大学との連携、地域との

の連携、そしてローカルからグローバルへ飛躍といった実践例を紹介した。同大学とは、例えばオランダ大使の聖徳学園での講演にポール・スノードン副学長が同席したことやマルコム・フィールド教授のグローバルセミナー出張講義などが、また地域との連携では新潟県阿賀町の農家宿泊・物産展開催や武蔵境活性化委員会との連携などが紹介された。グローバルな留学先として、アジア諸国を視座に行先を開拓している。そして同大学の高大接続には、多くの高校、地域、海外と結ぶハブまたはコアとしての役割を期待していると締めくくった。次に、中原氏は一八〇年も昔に遡る理系の私塾としての順天高等学校の歴史から話し、明治維新、終戦、現代のグローバル化という三つの開国の中で、日本人は外圧を能動的に変換してきた点を指摘した。同校では一九六四年の東京オリンピックの年から高校生の海外派遣が始まり、現在では、海外修学旅行で生徒全員に拡大している。一九八〇年代のジャパン・アズ・ナンバードワン時代には、多くの在外教育

平成27年1月28日教育学術新聞

施設が日本人子弟向けに設立され、バブルの崩壊とともに閉鎖された施設も多々あることを、自身の勤務経験に基づいて話した。当時と現代のグローバル化の時代との対比で、経済戦士を支えるための教育から、不調な経済を革新していける人材育成を教育に期待しているなどと述べた。最後にIB Learnerのプロファイルの最初に示される「探究する人」の育成のため高大接続が重要であると締めくくった。その後の質疑応答では、入試方法も含め活発な質疑が行われた。

IV-15. 杏林 AP 推進委員会（第1回～第3回） 議題

平成 26 年度
第 1 回 杏林 AP 推進委員会 議題

日 時：平成 26 年 10 月 20 日（月）14：00～16：10
場 所：三鷹キャンパス図書館棟 6 階大会議室
出席者：跡見裕学長、ポール・スノードン副学長、大瀧純一保健学部長、
坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室長、進邦徹夫総合
政策学部教授、バージニア喜多特任講師、吹野俊郎広報・企画調査室長、
塚本悌三郎大学事務部副部長、森芳久八王子事務部副部長、晝間大郎
地域交流課（高大接続推進担当）課次長、青柳貴徳地域交流課（高大
接続推進担当）課長
欠席者：渡邊卓医学部長、大川昌利総合政策学部長、加藤信一事務局長、
五十嵐一夫大学事務部長、内藤俊朗八王子事務部長

【報告・審議事項】

- ①杏林 AP 推進委員会メンバーについて
②高大接続推進委員会メンバーについて
③「大学教育再生加速プログラム日英中トライリンガル育成のための高大接続事業運用規程」
④「杏林大学高大接続推進室規程」
- 大学教育再生加速プログラム テーマⅢ（高大接続）について
- 平成 26 年度事業計画について
- 5 年間の成果目標（数値）について
- 第 1 回杏林 AP ラウンドテーブルについて
- ホームページ進捗状況について
- ライティングセンター 進捗状況について
- IELTS 試験対策講座（高校生、杏林学生）
- 高等学校訪問について（SGH,SGH アソシエイト、連携促進高等学校）
- 採択後の文部科学省とのやり取りについて
10/8 交付申請書提出、10/15 ポンチ絵修正依頼、表紙修正依頼 10/22迄
- その他

平成 26 年度 第 2 回 杏林 AP 推進委員会 議題

日 時：平成 26 年 12 月 15 日（月）16：00～17：05
場 所：三鷹キャンパス図書館棟 6 階大会議室
出席者：跡見裕学長、ポール・スノードン副学長、渡邊卓医学部長、大瀧純一保健学部長、大川昌利総合政策学部長、坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室長、蒔田耕平事務局長、吹野俊郎広報・企画調査室長、五十嵐一夫大学事務部長、内藤俊朗八王子事務部長、森芳久八王子事務部副部長、晝間大郎地域交流課（高大接続推進担当）課次長、青柳貴徳地域交流課（高大接続推進担当）課長
欠席者：バージニア喜多特任講師

【報告・審議事項】

1. SGH 等出張または文書によるコンタクトについて
2. 高校教員向け AP 事業パンフレット作成について
3. AP の HP 完成について
4. ライティングセンターのセッション開始について
5. IELTS 高校生向け対策講座について
6. ライティングセンター工事について
7. 会計報告
8. 日英中トライリンガルキャンプについて
9. 第 2 回杏林 AP ラウンドテーブル開催について
10. FD / SD について
11. 順天高等学校の分子生物学実験と生物英語学習の研修受け入れについて
12. アドバンスト・プレイスメントに向けた履修規程、学則改訂準備について
 - ①他大学での例について
 - ②今後の進め方について
13. 外部評価委員の選定について
14. 教育用資料費の執行について
15. 27 年度事業予定告知用リーフレットの作成、配布先について

平成 26 年度 第 3 回 杏林 AP 推進委員会 議題

日 時：平成 27 年 2 月 16 日（月）16：00～17：15
場 所：三鷹キャンパス本部棟 11 階南会議室
出席者：跡見裕学長、ポール・スノードン副学長、渡邊卓医学部長、大瀧純一保健学部長、大川昌利総合政策学部長、坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室長、バージニア喜多特任講師、蒔田耕平事務局長、吹野俊郎広報・企画調査室長、五十嵐一夫大学事務部長、内藤俊朗八王子事務部長、森芳久八王子事務部副部長、晝間大郎地域交流課（高大接続推進担当）課次長、青柳貴徳地域交流課（高大接続推進担当）課長
欠席者：なし

【報告・審議事項】

1. 第 2 回杏林 AP ラウンドテーブル開催結果について（1/20）
2. 日英中トライリンガルキャンプについて（3/25・26）
3. I E L T S 高校生向け対策講座について（1/31 から毎週土曜日、3/28 受験日、22 名参加）
4. 県立神奈川総合高等学校への訪問（1/30）結果について
5. 日出学園高等学校（2/3）、関東国際高等学校（2/4）、聖徳学園高等学校（2/5）の杏林大学への訪問結果について
6. 順天高等学校との連携協定締結について
7. 外部評価委員の選定について
8. ライティングセンターの活動について
9. 教育用教材資料の購入について（電子書籍＝英語の易しいリーダー、和書英訳本）
10. 横浜国立大学主催の「大学教育再生加速プログラム推進フォーラム」（2/21・22 開催）
11. 教育学術新聞への記事掲載について（1/28 掲載・「高校と大学をつなぐ FD / SD（1/5 開催）」）
12. 予算の執行について（新聞広告掲載）
13. 日英中トライリンガルキャンプ費用について
14. I E L T S 対策講座の費用について
15. 文部科学省宛調書の提出について（①補助金調書②交付請求書）
16. 関東国際高等学校の SGH 申請に係る本校教員へのオブザーバー就任依頼について
17. 聖徳学園高等学校の SGH 申請に係る本校教員へのグローバルセミナー評価委員会委員の就任依頼について
18. その他

IV-16. 高大接続推進委員会（第1回～第6回） 議事録

平成26年度 第1回 高大接続推進委員会 議事録

日 時：平成26年10月16日（木）12：15～13：10
場 所：八王子キャンパスD棟第一会議室
参 加 者：ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室長、進邦徹夫総合政策学部教授、北村一真外国語学部講師、藤田由香利外国語学部助教、バージニア喜多特任講師、五十嵐一夫大学事務部長、森芳久八王子事務部副部長、晝間大郎地域交流課（高大接続推進担当）課次長、青柳貴徳地域交流課（高大接続推進担当）課長

【報告・審議事項】

1. 杏林 AP 推進委員会メンバーについて

森副部長より杏林 AP 推進委員会のメンバー構成について説明が行われた。続いて、稲垣教授より、杏林大学高大接続推進委員会のメンバーについても追加説明。

2. 大学教育再生加速プログラム テーマⅢ（高大接続）について

今回のプログラムは、本年4月に文科省から公募があり、5月末日までに申請し、8月の面接・審査を経て、9月に採択され、10月に予算がおりたものである。5か年に渡る補助事業であるが、今年度もその1年目にあたっており、短期間で様々な事業を実施していく必要がある。大学教育再生加速プログラムは、教育再生実行会議（国の教育方針を決めていく会議）の第四次提言で示されたもので、入試改革と高大接続について計画的にしっかり実行していく大学に支援を行っていくというものである。

なお、今回の申請者は学長名、事業担当者は外国語学部長名で提出している。事業対象は外国語学部で申請したが、全学的に取り組みを波及させていかなければならない。

3. 平成26年度事業計画について

4. 5年間の成果目標（数値）について

5. 第1回杏林 AP ラウンドテーブルについて

第1回杏林 AP ラウンドテーブルを開催予定。4高校が参加予定であり、杏林大学側からは跡見学長以下16名が参加予定。

6. ホームページ進行状況（口頭）について

大学HPトップに「高大接続」のバナーを設け、そこをクリックすると次のページに入っていくことができるようにする。

7. ライティングセンター 進行状況（口頭）について

設置場所はガーデン丘2階の国際交流プラザ内だが、設置位置を検討中である。

平成 26 年度 第 2 回 高大接続推進委員会 議事録

日 時：平成 26 年 10 月 29 日（水） 11：00～12：30
場 所：八王子キャンパス D 棟第一会議室
参 加 者：稲垣大輔高大接続推進室長、北村一真外国語学部講師、森芳久八王子
事務部副部長、晝間大郎地域交流課（高大接続推進担当）課次長

【報告・審議事項】

1. 日英中トライリンガルキャンプ

杏林よりインテンシブクラス 20 名、中国語学科 20 名がピアサポーターとして参加し 3 月 23~26 日を候補とする。1 泊 2 日とし、インテンシブクラス 20 名、中国語学科 10 名と高校生とする。八王子セミナーハウスか代々木オリンピック青少年センターを候補とする。

2. IELTS 高校生向け対策講座

受験は土曜日を検討している。（三鷹）

3. 杏林・連携高校との FD / SD

11 月 18 日 5 限にゼミナール活動の一環として聖徳学園の萩原先生と秋多中学の宮崎先生をお呼びする。ワークショップ型 FD と位置付け他の先生方の参加も募る。

4. 第 2 回 AP ラウンドテーブル開催

5. アドバンストプレイスメントに向けた履修規程、学則改訂準備

科目等履修生規程、聴講生規程が準用できるか検討し、教務課と相談となる。来年度 4 月からは、

グローバル科目または COC 科目の土曜日開放を目指す。ライティングセンターの土曜日開放も考えられる。夏季・春季集中は後日検討する。

6. SGH 等の高校へ出張または文書によるコンタクト

7. 高校教員向け AP 事業パンフレット

レイアウト・デザインも含めて校正作業中である。1000 部を作成予定。

8. 外部評価委員について

今後依頼をかけるが現在検討中である。

9. ライティングセンターのセッション

① Guidance Session

11 月 5 日から水曜日と金曜日

② Workshop 11 月 17 日（月）

③ 個別指導

④ Paid Tutor

10. 教育用資料の購入について

ライティング関係と受験関係（IELTS, TOEFL）を中心に AV 教材、オンライン教材、図書などを選定する。

平成 26 年度 第 3 回 高大接続推進委員会 議事録

日 時：平成 26 年 12 月 3 日（水） 17：30～19：00
場 所：八王子キャンパス D 棟第一会議室
参 加 者：ポール・スノードン副学長、稲垣大輔高大接続推進室長、進邦徹夫
総合政策学部教授、東克巳保健学部教授、北村一真外国語学部講師、
バージニア喜多特任講師、藤田由香利外国語学部助教、五十嵐一夫
大学事務部長、内藤俊朗八王子事務部長、森芳久八王子事務部副部長、
青柳貴徳地域交流課（高大接続推進担当）課長、晝間大郎地域交流課
（高大接続推進担当）課次長、高橋結地域交流課（高大接続推進担当）
職員

【報告・審議事項】

1. SGH 等出張または文書によるコンタクトリスト化について
2. 高校教員向け AP 事業パンフレット作成について
 - ・日英中トライリンガルキャンプで配布する高校生向けパンフレット
 - ・事業案内リーフレット：パンフレットに同封し年内に配布予定。
 - ・27 年度のイベント予定の確定について
3. AP の HP 完成について
大学 HP トップの右側にバナーを設けている。記事のアップについては、高大接続の事務員にて更新システムにより作業。
4. 総合政策学部の高大接続推進委員追加について
5. ライティングセンターのセッション開始について
11 月のインフォメーションセッションには 28 名の生徒が参加。他大学のライティングセンターに訪問（創価大学・早稲田大学（早稲田には 2 回訪問））
6. 順天高等学校の分子生物学実験と生物英語購読の研修受け入れについて
7. 日英中トライリンガルキャンプについて
2015 年 3 月 25 日（水）・26 日（木）八王子セミナーハウスにて実施予定。参加者は高校生 30 名（見込）、大学ピアサポーター、引率教員
8. 第 2 回 AP ラウンドテーブル開催について
2015 年 1 月 20 日（火）18：00 外来棟第 2 会議室にて予定している。
9. IELTS 高校生向け対策講座について
1 月 31 日から三鷹で試験対策講座を開催（全て土曜日、計 6 回）
10. アドバンストプレイスメントに向けた履修規程、学則改訂準備（A.Placement）
11. 外部評価委員の選定について
12. 教育用資料の購入について
現在、英語関連と中国語関連ともに書籍の選定中である。

平成 26 年度 第 4 回 高大接続推進委員会 議事録

日 時：平成 27 年 1 月 7 日（水） 16：20～17：30
場 所：八王子キャンパス D 棟第一会議室
参 加 者：稲垣大輔高大接続推進室長、進邦徹夫総合政策学部教授、北村一真
外国語学部講師、バージニア喜多特任講師、岡村裕総合政策学部准教授、
藤田由香利外国語学部助教、五十嵐一夫大学事務部長、内藤俊朗八王子
事務部長、森芳久八王子事務部副部長、青柳貴徳地域交流課（高大接続
推進担当）課長、晝間大郎地域交流課（高大接続推進担当）課次長、
高橋結地域交流課（高大接続推進担当）職員

【報告・審議事項】

1. 日英中トライリンガルキャンプについて
ピアサポーター：中国語学科は留学生 7 名（参加者により人数調整）、英語学科は留学経験者を基に募集。本学の人数については高校生の参加者により人数調整を行う。
2. 第 2 回 AP ラウンドテーブル開催について
2015 年 1 月 20 日（火）18：00 外来棟第 2 会議室にて実施予定であり議題はトライリンガルキャンプ及び IELTS について、を予定している。
3. IELTS 高校生向け対策講座について
1 月 31 日から毎週土曜日、35 名定員計 6 回（15：00-18：30）の講座。現在 5 名の参加希望者。
4. 平成 26 年度高校と大学をつなぐ FD / SD 開催結果
1 月 5 日（月）に開催し 68 名の参加者。大学 HP に記事が掲載されたことに伴い、日本私立大協会の新聞に今回の記事の掲載依頼があった。
5. AP 事業案内パンフレットの完成と発送（92 高校）について
6. アドバンストプレイスメントに向けた履修規程、学則改訂準備について
7. 外部評価委員の選定について
5 月までには委嘱状が出せるよう調整中。
8. 読売教育ネットワーク掲載、教育学術新聞（キャンパス万華鏡）掲載
9. ライティングセンターのセッション開始について
6 名のピアチューターを面接にて決定。13 日（火）お昼休み（12：15-12：45）にオープンハウスパーティーを実施予定。またグローバル関連で NZ より来ているニコラス先生に 14（水）、15 日（木）のお昼休み（12：15-12：45）に特別レクチャーをしてもらう。
10. 順天高等学校の分子生物学実験と生物英語学習の研修受け入れについて
3 月 11 日に実施。定員最大 27 名。
11. 教育用教材資料の購入について
12. 平成 27 年度事業予定（日程）パンフレットの作成について
2 月にはスケジュールを確定・印刷し、高校へ送付予定。
13. ポートフォリオ・ルーブリックの作成準備について
グローバル事業でのポートフォリオ、ルーブリックの内容を参考にしながら高校生向けのポートフォリオ・ルーブリックを作成していく。評価方法や基準など今後検討する。
14. 聖徳学園高校 インターナショナルミュージックフェスタへの留学生参加について
3 月 29 日に実施。自国の音楽演奏をする留学生を募集している。→中国人留学生の陳くんに二胡の演奏を依頼。
15. 予算の執行について

平成 26 年度 第 5 回 高大接続推進委員会 議事録

日 時：平成 27 年 2 月 4 日（水） 16：20～17：20
場 所：八王子キャンパス D 棟第一会議室
参 加 者：稲垣大輔高大接続推進室長、岡村裕総合政策学部准教授、北村一真
外国語学部講師、バージニア喜多特任講師、藤田由香利外国語学部助教、
青柳貴徳地域交流課（高大接続推進担当）課長、晝間大郎地域交流課
（高大接続推進担当）課次長、高橋結地域交流課（高大接続推進担当）
職員

【報告・審議事項】

1. 日英中トライリンガルキャンプについて（3月25日・26日）
参加高校生への配布資料を作成。配布資料は2月下旬発送予定。八王子セミナーハウスの見積書・予約表の確定。現時点で48名が宿泊予定。
2. IELTS 高校生向け対策講座について
初回は授業が終わってから参加する高校生もあり、遅刻者も多かった。ライティングとヒアリングのテストも実施、高校生は楽しく授業を受けている印象を受けた。事務職員が順番で講座に付き添う。学習の評価を行うため、試験の成績を日本英語検定協会より送付してもらい教育的な評価をし、高校教員と意見交換等をする必要がある。
3. 日出学園高等学校の訪問について
2月3日（火）10時に日出学園高等学校を訪問。（英語教育強化地域拠点事業の申請検討）
4. 県立神奈川総合高等学校訪問について
1月30日（金）に神奈川総合高等学校を訪問。
5. 順天高等学校と連携協定締結に向けて
今後協定の調印を行う方向で、双方の日程の摺り合せをしていく。
6. SGH 申請に向けて
2月4日（水）関東国際高校の黒澤副校長が来訪し2月5日（木）には聖徳学園高校の山名先生が
来訪予定である。SGH 申請に向けての協力についてなど今後の具体的な活動について話を進めた。
7. 外部評価委員の選定について
8. ライティングセンターの活動について
1週間で18時間のセッションの開講を考えている。
9. 教育用教材資料の購入について
英語の易しいリーダー、和書の英語翻訳書などに関して電子書籍の導入を検討。
10. 横浜国立大学主催の「大学教育再生加速プログラム推進フォーラム」
当該フォーラムにて杏林大学の AP 事業パネルの展示とパンフレットを配布する。
11. トライリンガルキャンプの当日の準備・スケジュール・貸切バス等（往復）、動画撮影 DVD 化について
12. 次年度英語キャンプ、中国語キャンプについて
13. 平成 27 年度事業予定（日程）パンフレットの作成について
英語キャンプや中国語キャンプ、ライティングセミナーなど具体的日程を検討していく。
14. マナビジョン広告について
マナビジョン（進研アド）という高校生向け受験サイトにバナー広告を掲載する。

平成 26 年度 第 6 回 高大接続推進委員会 議事録

日 時：平成 27 年 3 月 4 日（水） 12：00～13：00
場 所：八王子キャンパス D 棟第一会議室
参 加 者：稲垣大輔高大接続推進室長、進邦徹夫総合政策学部教授、北村一真
外国語学部講師、藤田由香利外国語学部助教、バージニア喜多特任講師、
森芳久八王子事務部副部長、青柳貴徳地域交流課（高大接続推進担当）
課長、晝間大郎地域交流課（高大接続推進担当）課次長、高橋結地域
交流課（高大接続推進担当）職員

【報告・審議事項】

1. 平成 27 年度補助金調書の提出について
2. 補助金対象外の経費について
3. eBook の閲覧について（学内、My Library、
連携高校から）
大学のマイライブラリーで検索して閲覧。連携高等学校からも見られるようにする、高大接続の HP を変更して ID とパスを入れて高校生が見られるようにする。学内への周知も徹底する為、各学部へ説明をして学生の利用を図る。
4. 日出学園高等学校への訪問について
2 月 26 日スノードン副学長、稲垣室長、青柳にて訪問。中学の英語の授業（ネイティブ、日本人が行う英語の授業）を見学し今後の協力体制を話し合った。
5. 外部評価委員の選定について
6. ライティングセンターの活動について
年度内に環境整備を行い学期が始まるまでには生徒が使用できるようにする。
7. 平成 27 年度イベント予定リーフレットの作成
について
3 月 10 日に納品予定となった。
8. 予算の執行について
9. ルーブリックの作成について
業者と打合せを行い 3 月 19 日に納品するよう製作中である。日英中トライリンガルキャンプにて、高校の先生方に見ていただき意見を参考とする。
10. 平成 26 年度トライリンガルキャンプについて
当日の準備・スケジュール・貸切バス等（往復）、案内状送付など進捗説明。
11. 平成 27 年度トライリンガルキャンプについて
8 月末を候補日とし会場の手配を今後行う。
12. 平成 27 年度英語キャンプ、中国語キャンプ
について（学部との合同開催）
13. 平成 27 年度杏林 AP ラウンドテーブルの開催
について
14. IELTS の効果測定について

V. 事業推進組織 委員一覧

平成26年度 杏林 AP 推進委員会 委員一覧

跡見 裕	学 長	
ポール・スノードン	副学長	
渡邊 卓	医学部長	
大瀧純一	保健学部長	
大川昌利	総合政策学部長	
坂本ロビン	外国語学部長	
稲垣大輔	高大接続推進室長（外国語学部教授）	
バージニア喜多	特任講師	
蒔田耕平	事務局長	
吹野俊郎	広報・企画調査室長	
五十嵐一夫	大学事務部長	
内藤俊朗	八王子事務部長	
森 芳久	八王子事務部副部長	（事務局）
青柳貴徳	地域交流課（高大接続推進担当）課長	（事務局）
晝間大郎	地域交流課（高大接続推進担当）課次長	（事務局）

平成26年度 高大接続推進室 委員一覧

室 長	稲垣大輔	外国語学部
副室長	進邦徹夫	総合政策学部
	東 克巳	保健学部
	高木徹也	医学部
	岡村 裕	総合政策学部
	北村一真	外国語学部
	藤田由香利	外国語学部
	バージニア喜多	高大接続推進室
	五十嵐一夫	大学事務部
	内藤俊朗	八王子事務部
	浅野 稔	医学部事務部
	森 芳久	八王子事務部
	青柳貴徳	高大接続担当（事務局）
	晝間大郎	高大接続担当（事務局）
	高橋 結	高大接続担当（事務局）

文部科学省「大学教育再生加速プログラム テーマⅢ(高大接続)」平成26年度採択
日英中トライリンガル育成のための高大接続

平成26年度 事業報告書

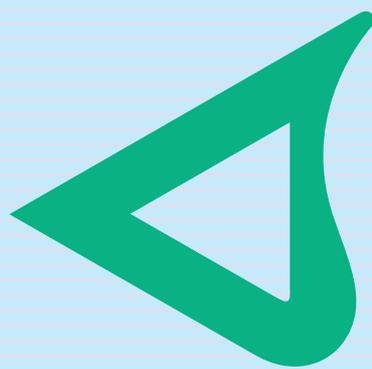
発行日 平成27年7月

編集発行 杏林大学 高大接続推進室

〒192-8508 東京都八王子市宮下町476

TEL 042-691-0011 FAX 042-691-5359

<http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/trilingual/>



KYORIN